
間違いで始まる物語

Sebolt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間違いで始まる物語

【Nコード】

N7868M

【作者名】

Seabolt

【あらすじ】

「あの・・・」と自販機に向かってる女性に声をかける男性・・・
彼女が振り返ると・・・男性は相手を間違えたことに驚く・・・
そして、始まる物語・・・

第1話 「まちがい」

「あの・・・」

自販機に向かって、飲み物を選んでいる

女性に後ろから声をかける恭介・・・

恭介は、今日こそ、野村るみを誘おうと決意してた。

見た目少しおとなしめな彼女・・・

恭介は、入社したときから気になっていた・・・

そして、ついに

「あの・・・今晚・・・お食事でも・・・」

恭介が言おうとした時だった。

「えっ」

彼女が振り返った。

顔を見た瞬間・・・

恭介は、驚いた・・・

「君、今なんて言ったの？」

それが彼女が発した最初の言葉だった。

「あつ・・・いや・・・」

言葉を濁す恭介・・・

なぜ、山本さんがここにいるんだ？

さつき、なべ（渡辺）のやつ・・・

野村さんがここに入ったって・・・

一体どうなってるんだ・・・

パニックにおちいった・・・

「今、食事とか・・・言わなかった？」

山本はきつく聞き返す。

「あつ・・・すみません。間違えました。」

思わず言ってしまった恭介・・・

「間違い・・・って、バカにしてるの・・・」

ヒートアップする彼女・・・

山本は美人でスタイル抜群で仕事もできる。しかし、気が強く怖い

と会社で評判の女性だった。

「すみません。」

再び謝る恭介……

彼女は、右手を頭をあてて、ふうくとため息をついた。

そして

恭介の顔を見て

「君、そこに座りなさい……」

恭介をベンチに座らせた。

ちよこんと座りうつむいく恭介……

その前に仁王のように立つ山本……

「あなた……名前は？」

山本の尋問が始まった。

「久保です。」

びくつとして答える恭介。

「ふうん」

恭介の顔をじろじろと見る山本・・・

「あなたが、歓迎会で、女装をしたって有名な久保君なんだ・・・」

「・・・」

恭介は答えられなかった。

それは歓迎会の２次会の出来事だった。スナックの女の子がイタツラで恭介を女装させた。

そのことが社内でも有名になっていたのだ。

「どうなの・・・久保君？」

山本がきつく聞きなおした。

びくつとした恭介

「はい・・・」

ただ答えるので精一杯だった。

「で・・・」

「・・・」

「で・・・」

もう一度きつく言う山本・・・

「で……とは？」

か細い声で聞き直す恭介……

「さっきの食事とかは……なんの間違いかな？」

恭介を指差し……

あやしい笑みを浮かべ聞く山本

「すみません……」

三度あやまる恭介……

「誰と間違えたのかな？」

山本の指先は、恭介の額に近づき、やがて、つんと頭を押した。

「……」

うつむいて黙る恭介……

「教えなさい……」

野村は、つん……つんと恭介の頭を押した。

しかし、黙る恭介を見て

「バカにしているの……」

今度は、すごんできた・・・

恭介は、その恐怖に思わず

「野村さん・・・です」

「ふうん・・・久保君は、るみちゃんが好きなんだ・・・」

まじまじと久保を見る山本・・・

彼、結構かわいい顔してるし、もうちょっといじめようかなと思っ
ていた。

「じゃあ、私から言っちゃおうかしら・・・」

山本が言うと

「やめてください。・・・俺からいいます。」

恭介は思わず言ってしまった、

「ふうん・・・好きなんだ」

また、うつむく恭介・・・

恭介の姿をみて、腕を組んだ山本は

「私の口結構、軽いんだけど・・・」

「やめてください・・・何でも言っこと聞きますから・・・」

それを聞いた恭介は顔を上げて、思わず叫んでしまった。

「ふうん・・・何でも、ねえ？」

「あっ、いや・・・なんでも、って」

しどろもどろになる恭介、

しまった・・・最悪だ・・・

恭介があたふたしている様子をみながら山本は

「わかってるわよ、そんな無茶は言わないわよ。」

ふとあることを思い出した。

そして

「じゃあ、合コンに出てくれる？」

山本は言い出した。

「えっ・・・」

絶句する恭介、

しかし、次の誘い文句が恭介を地獄に落とした。

「今週金曜の合コン……るみちゃんも来るんだけど……」

恭介は思わず「はい。」と返事をしてしまった。

「はい。っていったわね……」

山本は恭介の両肩に手を掛けにこやかに話しかけた。

「はい。」

恭介は再び返事した。

「そう、よく決断したわね……実は、女の子が一人足りないの。」

「

「えっ」

第2話 「ためいき・・・」

はあくため息をつく恭介・・・

そして

立ち上がり廊下をとぼとぼと歩く・・・

向うで渡辺がにやついて立っていた。

「なべ！ 俺をだましたな！！」

恭介は渡辺に近づいて行った

「いや、おれは、野村さんが入ったのを見たと言っただけだ・・・」

渡辺は目をそらして言い訳を始めた・・・

恭介はその態度と言葉に、あきれた・・・

「じゃあ、次は俺が野村さんでもお誘いするか・・・明後日の金曜でも・・・」

渡辺はかっこをつけて言った。

「それで断られたら、なべは、あきらめるよ・・・」

「俺が断れるとでも？」

恭介はうなずいた。

「まさか……」

渡辺は恭介の顔をみた

「約束だぞ……」

そう言ってにらむ恭介に……

「わかった・わかった……」

渡辺の適当な返事を聞いて、

恭介はため息をついた。

「ところで……どうしたその顔？ひよっとして……やまもとさんに相当、しぼられたんか？」

「そつだよ……」

恭介は渡辺を置いて、事務所に戻った。

そして、さっきのことを思い出した。

にこやかに話しかけてきた山本

「じゃあ、合コンに出てくれる？」

「えっ……」

絶句する恭介、まさか、合コンに誘ってもらえるとは思っても見なかった。

しかも、次の一言が恭介を地獄へ落とすとは夢にも思わなかった。

「今週金曜の合コン……るみちゃんも来るんだけど……」

「はい。」

野村さんも来るんだ。そう思うと思わず元気よく返事してしまった恭介。

「はい。っていったわね……」

山本は恭介の両肩に手を掛けにこやかに話しかけた。

「はい。」

山本の雰囲気気を気にしつつも、恭介は再び返事を返した。

「そう、よく決断したわね……実は、女の子が一人足りないの。」

「

「えっ」

「えっ」じゃないわよ、今、”はい”で言ったわよね……」

恭介両肩握る手に力が入った。

「でっ……でも……それって……ひょっとして」

「そっよ」

にんまりと笑みを浮かべる山本・

「女装をしる……と」

山本はこくりと首を縦にふった。

「わっっ」

叫んで恭介は逃げようとしたが、

両肩を抑えられた状態で逃げる事ができない

ただ

その場でじたばたするだけだった。

「るみちゃんに言おうかしら」

山本の一言は、恭介の動きを止めた。

そして、

「さっき、何でも言うつことを聞く……て言ったじゃない。」

山本は問い詰めた。

「でも、それと、これとは・・・」

「じゃあ、るみちゃんに言ってもいいわよね」

恭介は、目をうるまして首を

横に振る・・・

「じゃあ、でてくれるの・・・」

山本が再度たずねた。

恭介はついに観念した。

「はい・・・」

うつむいた・・・

無理やり恭介の承諾を得た

山本はにこやかになって

「ところで、久保君は、メイクとかしたことあるの？」

「いえ」

「そうよねえ、女装といっても、ウィッグつけて、女物の服着るくらいでしょ？」

「はい。」

「じゃあ・・・」

山本は、メモに何かを書き、

恭介手渡した。

「これは？」

「合コンが、あさってだから・・・明日、明後日とここに行って

「ここは、・・・」

「フランって美容室・・・この勇気ちゃんに頼んどくから。」

「頼むって、何を」

「当然、あなたの女装を・・・それと携帯教えてよ・・・」

お互い携帯番号の交換をすませ、

山本が立ち去ろうとしたら

「明日チェックしに行くから。ちゃんと行くのよ。」

恭介は山本に念を押された。

最悪だ・・・

恭介は再びため息をついた。

第3話 「フランの前」

翌日

恭介は、山本が言った美容室フランへ行った。

「ここか・・・」

フランが入っているビルの前に立っていると・・・

後ろから誰かが肩をたたいた・・・

振り向くとそこには

野村が立っていた。

「久保・・・くん・・・でしょ？」

野村は声をかけてきた。

「のむら・・・さん？」

驚いて聞きなおす恭介・・・

「わたしの名前覚えてたの・・・」

うれしそうに聞きなおす。

「まあ・・・とじろで、フランクは？」

恭介が聞くと

「あっ……山本さんからフランって美容室がいて聞いて……」

恭介は、やばい……と少し顔を背けた……

「どうしたの？」

不思議そうに野村が聞く

「いや……なんでもない……それで、今からフランに？」

慌てて話題を変えると

「今日は、場所だけ確認して、あさって予約取るって……」

「そうなんだ……で、予約取れた？」

「ちょっと無理みたい……忙しいみたい……」

野村は少し残念そうに話した。

「じゃあ……少しお茶でも……」

恭介が聞くと……

「ちよつとなら……電車まで時間があるから」

素直に野村が答えた。

心の中で、よっつしゃと喜ぶ恭介……

二人は、近くの喫茶店に入った。

喫茶店に入って、すぐに恭介の携帯がなった。

「すみません……30分ほど遅れます……はい……はい……」

恭介は携帯を切った。

「いいの……遅れて……」

野村は心配そうに聞いた。

「大丈夫、30分くらい……」

「ホントに？」

うれしそうに野村は、話を続けた。

「同じ同期でも、大違いね……渡辺君とは？」

ため息をついた。

「なべが何か？」

「なべ？って仲いいの？」

あきれた表情で野村が言う。

「まあ……同期だし……」

「まあ……って、彼、黙っていればましなのに……」

「ましって?」

不思議そうに聞き返す恭介

「これ内緒ね……今日、誘ってきたのよ」

「えっ?それで?」

「それが、バカ丸出しで……気持ち悪いし……」

野村は、散々、渡辺の駄目出しをした。

しばらく、二人は話をしていた。

「そろそろ時間よ……」

そう切り出したのは、野村だった。

「じゃあ……ここは、俺が出すよ……」

「同期だから割りカンよ。」

支払いを済ませ、店を出たふたり、

「俺こつちだから」

「私と逆・・・か」

野村は少しうつむいた。

「じゃあ・・・同じで」

二人は、反対方向に歩き出した。

野村が駅に向かっていている時

「るみちゃん！」と声がした・・・

ふと前を見ると山本がそこに立っていた。

「山本さん・・・」

「なんで、るみちゃんがここに？」

「山本さん、フランへ行ったんだけど・・・」

「けど・・・」

「予約が取れないって・・・」

「合コン前に行くつもりだったの？」

「違います・・・土曜日に行こうかなって」

「そう・・・ちょうどフランへ行くから・・・私から聞いてみましょうか？」

「本当ですか？」

二人はフランへ向かった。

二人がフランの前についた頃、恭介がちょうどフランに入るところだった。

恭介はフランの前に着くと茶髪で髪の毛の長い人が腕組みをして立っていた。

「遅い・・・山本さんに言うよ。」

「すみません。」

平謝りの恭介

「わかった・・・じゃあ中に入って・・・」

恭介が中に入っていきのを見た山本と野村・・・

山本は、あのバカ・・・遅れて来て・・・と少し切れかけていた。

野村は、あの女の人を待たせてた・・・

しばらくして、もう一人、格好いい男性が、フランへ入っていた。

「あっ・・・ちょっと待って・・・」

立ち止まり携帯をかける山本

「どうっ?」

「今からだから1時間くらいかな?」

「そう・・・」

携帯を切った。

「どうしたんですか?」

不思議そうに聞く、野村・・・

「るみちゃん。・・・ごめんね。今、男性客ばかりだった。私1時間くらい時間をつぶしてからにするけど、どうする?」

「じゃあ、帰ります。」

第4話 「変身」

恭介の女装が完了した頃、

山本がフランにやってきた・・・

女装のできに満足した勇氣は、遊びで服を着せ、

待合に座らせ、女性誌を読んでおくよう

恭介に指示していた。

「勇氣ちゃん・・・？」

店内に入ってきて山本が勇氣を呼んだ。

恭介は、指示通り座って本を見ていた。

その目の前には、山本が・・・

そして、店の奥から勇氣があらわれた。

「こんばんは、はるかさん・・・」

二人は普段通りの会話をした。

その光景を見ている恭介、自分の格好が恥ずかしくて

早く見つけてくれそう心で叫んでいた。

「ねえ、みせて……」

山本は気になるのか勇気をせかした。

「はるかさん……慌てないで……」

止めようとする勇気の背中を押して奥に入ってしまった。

店の奥には、恭介の姿はなかった。

「あいつ……逃げて帰ったの？」という山本に

「さつき、いたでしょ？」

何もなかったように言う勇氣……

「勇氣ちゃん？ 私をからかっているの？」

勇気をにらむ山本

「だから、入口にいたでしょう？気づかなかった？」

「えっ……」

慌てて入口に戻る山本……

そこには、本を読んでいた恭介が……

山本はその姿を見て……

「ひよつとして……久保君？」

「……」

手を小さく上げて振った。

「うそ……」

山本は驚愕を隠せなかった。

「どう？ 明日、午後から服をあわせるから……」

勇気が言った。

「信じられない……」

「あと、服で全体をいじって、そぶりとかも……」

勇気が話していると山本は思い出したかのようにメモを渡した。

「久保君……明日、あなた恭子ちゃんだから……一応、私の後輩ってことで、これをよく読んでおいてね」

「それと、明日、本当に頼むわよ……」

最後に念を押した。

翌朝、会社に出た恭介……

真っ先に会ったのは、暗い顔をした渡辺だった。

「恭介……」

「どうした。」

「振られた……完璧に」

「あっそう……」

そうだろう、野村さんかなり怒ってたもんなあ……と恭介は思い
つつ、

「そうそう、野村さん……見かけによらず、きついぞ……」

渡辺が恭介に話していたら目の前に野村の姿があった。

「おはよう……」

渡辺の後ろから野村が挨拶をしてきた。

渡辺は、びくつとして、直立不動になった。

「あっ……おはよう……」

恭介が挨拶を返したが……

野村は目をそらして、行ってしまった。

「あゝ、びっくりした……いたらすぐに言えよ。」

恭介に八つ当たりをする渡辺・・・

「そんな・・・あつという間じゃないか？」

恭介がそう言い返すと、渡辺は少しため息をはいて、

「今日付き合えよ・・・」

「今日は、無理だ・・・」

「何〜!!!、俺が振られたのに親友のお前も付き合ってくれないのか？」

「誰が親友だ・・・というより、今日は午後から、家の都合で無理・・・」

「そうか・・・」

残念そうに渡辺は、去っていった。

第5話 「合コン」

午後から雨が降り出した・・・

「あとは・・・恭子だけね・・・」

山本がつぶやいた。

「恭子さんって」

「今日は、わたしとあやか、るみ、そして、恵子の4人だったの・・・
だけど、恵子が急にこれなくなったでしょ？」

「はい、・・・」

素直に聞く野村・・・

「それで、はるかの後輩が来れるようになって・・・」

西本が割り込んで説明した。

雨の中、待ち合わせ場所で立っている3人

やがて話すことがなくなってきた。

まだフランかしら・・・早く来てよとあせる山本だったが、あることを思い出した。

「あっ・・・そうそう・・・るみちゃん、フラン明日15:00なら

いけるってどうする。」

「あっ 願います。」

その時

「はるかさん・・・お久しぶりです。」

か細い声が聞こえた。

皆が声の方向を向く

そこには

少しブラウン系がかかった肩までのストレートヘア

割りと目鼻立ちはくっきりしていて

かわいい感じの女の子が傘を差して立っていた。

しばらくして

山本は気づいたかのように

「ひさしぶり〜恭子ちゃん。」

恭介は、さしていた傘をたたみ、山本に近づいて、

「おひさしぶりです〜」

両手で握手した。

そして

山本はみんなに

「後輩の恭子ちゃん。こういうのあんまり行ったことないから・・・」

「久保田恭子です。よろしく・・・おねがいます・・・」

恭子は頭を下げた。

「じゃあ〜いくわよ・・・」

合コンが始まると、誰も女装と気づかないで時間が過ぎていった。

しかも

不思議なことにおとなしい恭子が人気が出た。

そんな時

男のほうから王様ゲームをしようと言い出したが、

女子からは大ブーイング・・・

あれこれ言っているうちに、

別々の紙に人の名前と行動を書いて組み合わせるといふゲームをしようということになった。

西本さんと大島君がしっぺをする・・・と、

しっぺをしたりして、

そのほかにも腕を組んでお酒を飲むとか、

デコピンをして「イタイ」とか騒いでいた

そのうちに山本さんと久保田さんがキスをする。となってしまうた。

え〜と驚く二人

しかし

皆はお酒が入っていて。

「キッス キッス」

コールが起こる。

「ほっぺでいいわよね。」

聞く山本に

「え〜っ」といふ奴もいたが、

「でも・・・女同士でしょ？」

「女同士でもみたい・・・」

一部の男が言った・・・

「じゃあ男同士ですか?」

反論すると・・・

少し空気が悪くなった。

結局

「ほっぺでいいじゃん」

男の一言が出て・・・ほっぺでいいということになった。

山本は恭介に耳打ちをする

「ここに早く済ませるのよ」

ほっぺを指差した。

「わかったわ」

恭介がほっぺにキスをしようとした時だった

山本の顔が恭介の方を向いた。

唇が触れた瞬間お互いが「えっ・・・」と驚いた。

別の男の一人が「キスが見たい」と山本の顔を動かしたのだった。

まわりは

「おお!!」

大盛り上がりした。

「ごめんなさい」

謝る恭介・・・

「いえ・・・大丈夫・・・」

さりげなく返す山本・・・

やがて、合コンも終わり

「お疲れ様でした。」

そういつて皆は、解散した。

恭介と山本を残して・・・

同じ方向に帰る二人・・・

雨はすでにやんでいた。

気まずい時間が流れた。

「これからどうするの?」

口を開いたのは、山本であった。

「フランによってから帰ります。山本さんこそ・・・」

恭介がいうと

「そうね」といって山本は恭介の肩を組んで顔を近づけた・・・

「いい、さっきのは、恭子ちゃんとしたんだからね!! わかってる?」

「はい」

恭介が返事をしようとしたら

「仲いいですね・・・お二人さん」と後ろから声がした

振り向くとそこには渡辺がいた。

渡辺は、恭介を見て

「彼女・・・」とナンパをはじめた

気色悪い・・・と思いつつ

今の自分の格好では、大声を出せない。

「やめてください。・・・」

そういうのが精一杯だった。

その時

「やめなさいよ!」

大声で山本が一括した。

その声にむっとした渡辺

その女性の方を見た

その女性が山本と気付くと

すぐに

「わあああ!! すみませんでした。・・・」

そう叫んで渡辺はそそくさと逃げていった。

「なにあの態度・・・」

山本がつぶやく・・・

そこに恭介の携帯がなる・・・

「えっ・・・ちよっちよっど、」

ふうくと恭介はため息をついた。

「どうしたの……」

「急用で……今日できないって……」

第6話 「合コンのあと・・・」

「じゃあ・・・」

そう言って帰ろうとする山本

「山本さん・・・!」

それを見て呼び止める恭介・・・

「なに？」

「着替え・・・どうしたら・・・」

「はあ、家で着替えれば・・・」

「それは・・・無理!!」

「なぜ・・・」

「独身寮・・・なべの奴もいるし・・・」

「そうね・・・だから？」

「だからって・・・」

「どうしたら？」

「思い切って、独身寮に戻ったら・・・」

「そ、そんなこと・・・どうなることか・・・」

真剣に言う恭介

それを見て笑う山本

「笑い事じゃないですよ・・・」

口を尖らせて怒る恭介を見て、

「ごめん、ごめん・・・もう・・・世話の焼ける。ちょっと来なさい。」

山本は、恭介の手を引っ張った。

そして

近くの雑貨屋に入った。

「とりあえずここでクレンジングを買って・・・」

「クレンジングって・・・?」

「うっ・・・じゃあ、一緒に来なさい。これとこれと。」

二人で店内を歩き、クレンジング、コットンをかごへ入れた。

「ネイルは?」

「ネイル？」

不思議そうに見る恭介

山本は彼の両手を取って見ると、カラフルにデザインされていた。

「まあ、かわいいこと……ここまでする？」と除光液をかごへ

「で、服は？」

「フランの中……」

それを聞いて山本はため息をついた。

「じゃあ。あと服とタオルと入れてきて……」

「あと、これと、これね……」

と氷、そして、ビール・ブランデー　そして、あてをポイポイとかごに入れる山本……

「ちょっと、これは？……」

それを見た恭介は……

「私んちに来るんでしょ？お酒ぐらい付き合っつてよ。」

「そ……それは？」

恭介は戸惑った。

「勘違いしないでよ。．．．それともテキストなホテルで着替える？」

「いえ、いえ、ありがとうございます。」

「じゃあ、全部あなたが払ってね」

「はい。．．．」

二人は、山本の家に向かった。

「とりあえず、洗面に入って、顔をおとして．．．」

山本は指示した。

恭介は、洗面所に入った。

まず、ウィッグを外したまではよかったが

顔を落とすってどうやって？と考えたがわからない

途方にくれた恭介は

「すみません。これどうやっておとすの．．．」

「こうして．．．」と教える山本．．．

何とかメイク・ネイルを落とした恭介．．．

そして

服を着替えていて、上を脱いだら、ブラジャーをつけていたのを思い出した。

どうしよう・・・これどうやって外すんだ？

手を後ろに回す恭介・・・

しかし

なかなか外れるない・・・

そこへ

「おそいわよ・・・」と顔を出す山本・・・

さっと前をTシャツで隠す恭介・・・

「なによ・・・なんか私が覗いているみたいじゃない・・・」

その様子を見た山本が聞いた

「あ・・・あの・・・」

うつむいて話す恭介

「なによ。はつきりいなさいよ。」

そして

Tシャツをはずし、ブラを見せる恭介……

「こ……これ外れないんだけど……」

まじまじと見入る山本

「なにもここまで……」と笑い出す山本

「笑い事じゃない……」

「ごめん、ごめん……本当に、ここまでやる？後ろ向いて」と
恭介を振り向かせた

そして

ホツクを外した。

ようやく、着替えをすませ。

「じゃあ、今日の合コン無事終了にカンパイ」

二人で乾杯し飲み始めた。

第7話 「小さい宴会」

山本は、今日の渡辺の行動を気にしていた。

「ところで、あんた達、あたしのことどう思ってるの？」

「なぜ？」

「だって、さっきの子もそうだったでしょ。あんなに顔色を変えなくても……」

山本はビールを一口飲んだ。

「うーん」としばらく黙り込む、恭介を見て

「怒らないから……正直、言ってよ……」

恭介に近づき、肩にひじをおいて、耳元でささやいだ……

「うーむ……実は、」

「実は……」

「美人でスタイル抜群で仕事できて……」

「できて？」

「……」

「で？・・・なに？」

「きつくて怖い・・・とうわさが流れてたんです。」

それを聞くと山本は

「えっ」と恭介の肩においていた肘をはずし、離れて、ストンと座った。

「きつく・・・て・・・こわ・・・い？・・・か」

うつむいてぼそりとつぶやいた。

「すみません・・・」

恭介が謝ると・・・

「いいのよ・・・そっか・・・怖いか・・・」

山本は少しなみだ目で恭介を見た。

恭介はその顔にドキツとした。

そして

慌てて

「でも、山本さんは、美人だし・・・」と言い出すと

「やめて・・・そんなに気を遣わないで・・・」

「すみません……」

あやまる恭介……

「で、久保君はどう思ったの……」

「最初は、怖いと思ったけど、実は、やさしいんだと……」

「またまた……」

「本当に困っているときは、ちゃんと助けてくれましたし……」

「ありがとうね……」

ようやく山本に笑顔が戻った。

「けど……」

「けど……」

「女装には、参ったけどね……」

「あ……そんなこと言うと、ばらすわよ……特になるみちゃんに……」

「それだけはんべんを……」

そして、二人は笑った。

しばらくして、

「ところで、今日のキス……」

恭介は思わず言ってしまった。

「気にしないで……大丈夫だから……」

と山本は答え

「ところで、あなたはどっだったの？」

逆に恭介に聞き返した。

「だ……い……丈夫……でした……」と恭介は少し目をそらした

それを見た山本は、恭介に目を合わせるように動き

「本当に？」と聞くと

恭介は、首を少し動かし目をそらし……

そして

「ふん……」とうつぶいた。

「ほんとう？」と再び聞かれると

「参りました。……」と恭介は頭を下げた。

「なんだ……よかった。……」

「よかった……って?」

「そつでしょ。なんとも思われてないなんて……」

「すみません。本当は、どきどきしてました。」

「正直でよろしい。私もひさしぶりだから……」

山本は恭介の頭を軽くたたいた。

そして

ため息を吐いた。

「ひさりぶりって、彼氏は」

「そんなこと聞くの?」

「ああ、いえ、すみません。……」

「いいのよ、別れたの3ヶ月前に……」

山本はビールを一口飲んだ。

そして

「2年も遠距離だったの……だから、耐えられなくて……」

とうつぶいた。

「大丈夫ですよ・・・」

「ありがとう・・・」

山本はにこやかにいった。

「そういえば・・・野村さんは？」

山本が話題をふると

「えっ・・・まだ、わかりませんよ。」

「なんで・・・」

「今日は、何も言う暇もない。合コンで・・・」

「あっそうか・・・」

そう言った時、山本の携帯がなった。

山本が携帯を見た瞬間、

それまでの笑顔が・・・

やがて暗くなり・・・

悲しみの表情が出てきた・・・

そして

携帯を放置した。

「いいんですか？・・・」

「なにを・・・」

「携帯・・・」

「別れた彼から・・・」

「だったら・・・」

「いいのよ・・・あんな浮気もの・・・」

やがて携帯の着信音は消えた・・・

「さあ・・・もういっぱい飲もうか」

「えっっ」

「なに・・・？」

「はい。飲まさせていただきます・・・」

宴会は、深夜まで続いた。

第8話 「頭が痛い・・・」

翌朝

いつまで飲んでたのだろう・・・

目が覚めた恭介

「あっ・・・」

ここはと思い出した。

山本の家だった。

そうか・・・そのまま寝てしまったんだ・・・とあたりを見ると

そこには、山本が寝ていた・・・

しばらくして山本も「うん・・・」と起き・・・

ふっと恭介を見た

山本も思考が止まったらしく・・・

考え込んで・・・

「おはよ・・・」といった・・・

「おはようございます・・・」

山本は、そうか結局あのまま飲んで・・・

二人とも寝てしまったんか・・・

そう思っているよ

恭介が「大丈夫ですか・・・」と聞いてきた。

「大丈夫よ・・・ところで、これからどうするの・・・、」

「とりあえず。寮に戻って・・・着替えて、フランに行って服を取ってきます。」

「そう・・・じゃ気をつけてね・・・それとこれは内緒よ」と釘をさした。

「はい。・・・」と恭介は部屋をでた。

恭介は寮に戻った。

寮といっても基本的にはワンルームマンション

ただ、近くに食堂があり、朝、晩が食べられるようになってだけだった。

とりあえず熱いシャワーを浴びる恭介・・・

「ふう〜」とシャワーからでると、呼び鈴が鳴る。

昨日着ていた服が袋に入ったままだったのを思い出し、やばいとす
ぐに押入れに入れた。

そして

服を着て「はい。」とでた。

「よう。」

そこには渡辺が立っていた。

「何だ、なべか……」

「なんだとは、なんだ……この朝帰りが……」

渡辺が恭介にヘッドロックをかける

「なにするんだ……」

ヘッドロックをはずす恭介

「だから……彼女と？」

しつこく聞いてくる渡辺

「家の用事のあと高校の友達とあって、そのまま飲んでたんだよ……」

「なんだ、つまんねえ」

「じゃあ
」

恭介は渡辺を部屋から出そうとすると

「じゃあつて、忙しいんか？」

「ちょっとな、そこに背広を忘れてきたから……いまから取り
に行くんだ。」

「怪しいな……」

しつこく聞く渡辺

「これだけ酒臭けりゃわかるだろう……」

恭介が言うつと、渡辺は、匂いを嗅ぎ

「うわぁ！くせ〜！」

「気付くんおそいんだよ！わかったら出て行ってくれ」

「何で追い出すんだよ！」

「今から出かけるって言ったろっつが」

「……」

しばらく渡辺は考えて……

「まあ、がんばってコイヤ！ 後で報告しろよ」

やっと渡辺は部屋から出て行った。

「うるさい」

本当にしつこい奴だと恭介は思った。

フランついた恭介。

「あつ・・・久保君」

勇気が近づいてきた・・・

そして

「化粧、きれいに落としてるね・・・」と話をしてきた。

「あの服・・・」と恭介が聞くと

「あゝあゝ 服ね・・・」

勇気が奥に服を取りに行った。

しばらくして、

勇気が「はい。服」と袋をわたそうとした時

カランと扉が開いた。

横を見て勇気が「いらっしやい」と言つと

「久保くん……」と声がした。

「えっ」と驚いて恭介が横を見た。

そこには野村が立っていた。

第9話 「はてさて・・・」

「久保君・・・なんで・・・ここにいるの？」

「あっ・・・いや・・・」

どもる恭介・・・

それを見た勇気が気を利かして

「久保さまは、2日前に来店して・・・。」

野村は、少しいい気がしなかった。

「ふ〜ん」

あせる恭介・・・

どうしよう・・・

さすがに女装したなんていえないし・・・

「この間は、ちょっとあせって・・・男が美容院で・・・わ
かるだろ」

恭介は言い訳を言った。

その言葉に勇氣は少しぴくっとなったが。

「野村さま、すみません・・・ここのお店は、男性の方も来店します。」

そう言つて、恭介のフォローをした。

「知ってるわよ・・・で？何で服を？」と野村が聞くと・・・

「服のコーディネートもしてるんです。久保さまは、服を着てあわせた後、

自分の服をお忘れになつたんです。」

勇氣はスラスラとうそをついて見せた。

「まあいいわ！」

野村は釈然としないまま、店に入つて行つた。

恭介は、しまったと思いつつとぼとぼ、家路についた。

野村は、折角先輩に予約してもらつたんだから・・・

とりあえず、やってもらふことにした。

席に座ると、勇氣以外の人がついた。

「あれ、勇氣さんじゃないの？」と野村が聞くと・・・

店員は少しむっとして、「勇氣は、基本的に常連さんと男性だけよ。」

「・

「あれ？山本さんの紹介できたんだけど・・・」

「山本さん？ってはおるかさんのこと？」

「はい・・・」

「はおるかさんの担当は、わたしよ・・・」

「そんなんですか？じゃあ、勇氣さんと仲いいみたいだけど・・・」

「えらく勇氣のことが気になっているみたいだけど・・・」

「いや、べつに・・・私は、女の子に興味はないわ・・・」

店員は手を止めていった。

「変なこと言うわね・・・」

「変なことって？」

「勇氣は、おとこよ・・・」

「うそ！」と野村は動こうとしたので、店員は作業を止めた。

「信じられない・・・どう見ても・・・」

「女の子に見えるでしょ？」

びつくりした表情のまま、コクリとうなづく野村……

店員は、続けた……

「そう見えるわよね、でも、勇気はゲイじゃないわよ……」

「え？」と野村は、頭の中が混乱した……

しかし、

調髪が始まり、

店員の腕がいいのに気づき、この店が気に入った

そして

思い切って久保のことを聞いた。

「一昨日、久保って男性が来てなかった？」

「あつ……さつき服取りに来た人！！」

「そうそう……」

「あの人ね……」

店員が話そうとすると勇気がゴホンと咳払いをした。

「あつ……」と店員が言葉を詰まらせた。

「どうしたんですか。」

「あの人ねえ、自分の服を忘れた行っただんですよ。本当にまぬけですよね。」

「そうだったんですか・・・男性客って結構来るんですか？」

「そうね、勇気がしつかりしてるから、特にデートの前に来る人が多いみたい・・・」

「そうなんですか」

野村は少し気が重くなった。

第10話 「それぞれ・・・」

「おい、恭介!!」と呼び止める渡辺

「なんだよ、なべ・・・」と振る向く恭介、

「金曜はどこ行ってたんだよ。」

「なんだよ。急に!!」

「朝帰りしたくせに・・・あやしいぞ・・・」

「だから言っただろう、高校の同期と飲んでだな。」

「同期って、おとこ?おんな?」

「あのお、会社ですの話か?」

「あやしいな」と渡辺が突っ込む

そこに

後ろから

「おはよう。」と声がした。

びくっとなる二人。

恭介は、恐る恐る振り向くと、山本と野村が立っていた。

「あつ！ おはようございます。」と挨拶する二人。

山本は、恭介に目線で合図をした。

恭介は、少しうつむき答えた。

野村を見ると恭介から少し目線をそらした。

そして

二人は行ってしまった。

「あゝびつくりした！！」

第一声を発したのは渡辺だった。

「何緊張してんだよ！なべ！」

「お前こそ！」

「俺は、後ろから急に声がかかったから、驚いただけだ！」

「うそつけ！」

「えらく、声をあげるな。本当はなんかあつたんか？一喝されたとか？」

恭介は、思わずなべに聞いた。

「実は、金曜日！めっちゃ！かわいい娘をみつけてな！」

「それで？」

「それで、その娘、ナンパしたら横に山本さんがいて

「いて……」

「一喝されたんだよ」と渡辺はため息をついた。

「一喝されてどうしたんだよ……」と続きを聞く恭介

「逃げたよ……」

「逃げたって？なべ、お前逃げたんか！？」

あの時の光景を思い出し笑い出す恭介

「ああ、もう一目散に……」

「どうして？」と笑いながら聞き返すと

「何、笑ってんだよ！恭介！！もうあれは、恐怖以外の何者でもない……」

「そんなに怖かったんか」

「ああ……でも……かわいかったよなあ、あの娘。」

この言葉に恭介が慌てた。

「お前……その娘……ちゃんと見たんか？」と聞きなおす恭介

「ああ……」

「暗かったせいじゃ？」

「なんだよ。急に……」

今度は怪訝な顔をする渡辺……

あんまり聞くと怪しまれると思い恭介は、聞くのをやめた。

一方、野村が山本と歩きながら聞いた

「知ってました？」

「何を」

「久保君って、フランに行ってたこと」

「木曜日に一緒に見たじゃない」

山本は思い出したかのように言った。

「あっそうか……」

「でもどうしたの？るみちゃん」

「土曜日も会ったの・・・フランクで・・・」

「そうなんだ・・・で？」

「それがね・・・服忘れたんだって。おかしいと思わない・・・」

「ほんと。まぬけね？」

少し笑みを浮かべて、野村を見ると

少しうつむいてため息をついて

「よっぽど気合入っていたんでしょうね。金曜日に・・・」と野村が言うと

山本は、手で口を押さえ、口元の笑みを隠した。

そして

野村の方を指差した・・・

それを見た野村は「ちがいます・・・」

そそくさと逃げていった。

第11話 「不安・・・」

「るみちゃん？」

山本が野村の後ろから声をかけた・・・

「はい・・・？」

後ろを振り向く野村・・・

やばい・・・どうしようと思っていた野村

そこへ・・・

「はるか！ちょっと・・・」

西本が割り込んできた。

「なに？あやか・・・」

ちょっと悔しいがにこやかに話す野村

そのにこやかな笑顔も次の瞬間、凍りついた。

「知ってる？西村さんがかえってくるって。」と西本が言うと。

「えっ・・・」

山本の動きが3秒間止まった。

「どづしたんですか？はるかさん？」

心配そうに聞く野村・・・

「あつ・・・いや・・・」

山本にさっきまでの切れのよさはなかった。

「よかったじゃない・・・はるか・・・」

西本は山本の肩をぼんとたたいた。

「あつ・・・じゃあ、行くわ・・・」

山本は落ち込んだようにその場から離れていった。

「はるかっいたら、もう照れちゃって・・・」

にこやかに見送る西本

「あやかさん・・・その西村さんて？」

野村が聞くと

「はるかの彼氏、2年3ヶ月ぶりにこっちの職場にもどるって。」

「あのはるかさんの彼氏・・・か・・・ところでどんな人なんですか？」

「そつねえ」

しばらく西村と山本の話題で持ちきりだった。

山本は、自販機の前でぼーっとしていた

哲也が帰ってくるの・・・か・・・とため息をついた。

そして、

どういう顔であつたらいいんだろう？

それとももう別れたし関係ないか

とか混乱している中・・・

「山本さん・・・浮かない顔してますね？」

声をかけてきたのは、恭介だった。

「なんだ・・・久保君・・・か？」

「なんだとはなんですか。どうしたんですか？なんか・・・元気がないですね？」

久保も自販機でコーヒーを買いベンチに座った・・・

「彼が帰ってくるの・・・」

「彼って？あの遠距離の？」

「そう・・・」

「ひょっとして・・・今度戻ってくる？」

「そう・・・」

「あちゃ〜」

そういつて恭介は天を仰いだ・・・

その頃野村は、自販機の前にいる山本を見つけた・・・

そして

近づこうとしたら。

恭介がいるのに気づき近くに身を隠した・・・

「どうしたら・・・」

不安を隠せない山本・・・

「迷ってるんですか？」と聞く恭介

「わからない・・・」

「何で？迷っているようにしか見えませんが・・・」

「うん」と山本は考えたあと、

「このまま、久保君を襲おかしら・・・」

「何を血迷っているんですか？」

少しあせって恭介は答えた。

「冗談よ・・・本気にしたの？」

「まあ、ちよつとね。」というと

「もうっ！」と手を上げる山本。

「おおっと!!」

手で受けようとし、コーヒーをこぼしかけた。

そして

「うわっ!!」

声を上げ慌てる恭介を見て

少し明るさを戻した山本、

恭介はその表情を見て

「普段どおりでいいんじゃないんですか？」

「そうねえ」

山本は恭介を見つめた。

「そうそう、仕事ができ、美人で・・・でも怖い山本さん・・・」

「なに言ってるの、怖いは余分よ・・・怖いは・・・」

山本は少し元気な声をあげた。

「じゃあ、そろそろ仕事に戻ります。」

「じゃあ・・・」

恭介は、山本を置いて去っていった。

第12話 「間違い・・・」

その場にかくれていた野村は、恭介が通りすぎていくのを見てから、自販機へ向かった。

そこには、まだ、山本がいた。

「あつ・・・るみちゃん」

野村に気付いた山本が声をかけた。

野村は少し浮かない顔をしていた。

「どうしたのるみちゃん？」

山本は、野村の顔をのぞいて聞くと

「あつ・・・いや・・・なんでもありません・・・」

「そう言えば・・・さっきまで、久保君がいたのに・・・」

野村はぴくつとなり、怖い顔で山本を見た。

「どうしたの？ るみちゃんそんなに怖い顔して・・・」

山本は驚いた顔をし、不思議そうに野村を見つめた。

「いえ、別に・・・」

「なんか・・・」

と山本は言おうとしたが、ふと野村の態度を見て、言葉を止め考えた。

そして

「久保君のことなんだけど・・・」

言おうとすると

怖い顔をして「もういいです!!」と野村は言い切り、顔をそむけた。

それを聞いた山本は、野村に目をやり、ぼそっと

「まだ、彼女いないんだって・・・」

とつぶやいた。

「えっ・・・」

さっきまで怖い顔をしていた野村が拍子抜けした顔になり、山本の方を見た。

「でも・・・さっき・・・」

戸惑った表情で、何か言おうとする野村

「えっ・・・」

驚いて野村の顔を見直す山本

「聞いてたの？」

「少し前から・・・」

「っていつから？」

少し怖い顔をする山本に

「久保君を襲おうか・・・あたりから・・・」

うつむき答える野村、

山本は、顔をそらし、前髪を掻き上げ、ふくと息をし、

「ああ・・・そこからね　あれはジョーダンよ・・・聞いてたでしよ？」

「はい・・・」

「その前に、彼から彼女いるのとか聞いてみてたの・・・」

「そうなんですか・・・」

「でも・・・さっさと出てくればいいのに・・・」

「雰囲気よかったので、入りづらかったし・・・」

「そう・・・わかったわ・・・それはそうと、いないって聞いたからどうするの?」

「でも・・・」

「でも?」

「金曜日・・・」

「なにいつてんのよ!今日の時点で、いないってことは・・・金曜も駄目だったってことでしょ」

「あっ・・・」

少し笑みがでる野村・・・

「もうっ・・・世話の焼ける・・・で?どうすんの?」

「でっ・・・とは?」

少しもじもじする野村・・・

「まあ・・・普通、自分から言わないもんね・・・」

山本は立ち上がり、すれ違いざまに野村の方をポンと叩き、振る向いた

そして

小さくガッツポーズを見せ「がんばってね・・・」とつぶやいて去っ

ていった。

数日後……

恭介を見かけてた山本は、すれ違いざまに14時頃自販機に来てと伝えた。

恭介は、何かいやな予感がしたが、ただ「はい……」と答えた。

「るみちゃん、さつき自販機の所から出るとき、久保君とすれ違ってたよ。ひよっとしたら、まだ一人かも……」

山本は野村に伝えた。

野村は、自販機の所へ向かった……

しかし

そこには誰もいなかった。

もう行ってしまったのか

とため息をつき……

コーヒーでもと自販機に向かった。

恭介は山本さん一体何のようだろうと思いつつ、

ふと見ると自販機に向かっている女性が立っていたので

「山本さん・・・何のようです？」と声をかけた・・・

その時だった・・・

ぴくつと動いた女性・・・

しばらくの沈黙のあと・・・

「はい？」の返答が帰ってきた・・・

そして

振り返った女性は、野村だった・・・

第13話 「誤解・・・」

振り返った女性を見て慌てる恭介

そして

山本さんも何か言ってくれれば・・・

本当にまずい・・・と

「あつ・・・いえ・・・」

恭介は言葉を詰まらせた。

「久保くん？」

「はい・・・あの・・・」と返事に困っていた・・・

「いま、なんて・・・？」

野村は、悲しい顔で口を押さえ、恭介を見つめていた。

「・・・」

恭介は、混乱し、答えることができない・・・

二人の間を気まずい空気が支配した。

「いま・・・山本さん・・・って・・・言った？」

重い空気を振り払うように口を開いたのは、野村だった。

恭介は、血の気が引いた……

そして

パニック状態のまま……

「ごめん……まちがえた……」

恭介はとっさに言ってしまった。

それを聞いて

野村は、何も言わず……

走り去っていった……

その場に立ち尽くす恭介……

振り向くまでは

山本さんの姿だったことを思い出し……

なぜ？……と……

頭を抱え

しばらく座り込んでしまった。

山本は、そろそろ・・・かな？と思い自販機に向かっていた。

そこへ

走ってくる野村を見て

「るみちゃん・・・」

声をかけたが

野村はそのまま走り去って行った。

様子がおかしいことに気付いた山本は、自販機に行くと、

そこには、

頭を抱えた恭介がベンチに座っていた。

その様子を見て

「何を言ったの？」と声をかけると

「・・・」何も答えない。

恭介の前に両手を組んで立ってもう一度「何を言ったの？」と聞くと

目の前が暗くなったのみ気付いた恭介はおもむろに頭をあげ・・・

そして

「まちがえた……」とつぶやいた

「何を間違えたの？」

声を出さずに山本をじっと見つめる恭介……

「ひょっとして……」

山本は自分を指差した。

そうすると

恭介は、こくりとうなずいた……

「何やってんのよ……なんで……？」と聞いたが

「わからない……」と首を横に振る

「で……私と間違えたの」

「そうです。」と恭介は答えた。

山本は、両手を組み、天を仰ぎ、ため息をついた。

そして、

「でも、見たらわかるでしょう？」

「それが……」

「それが・・・？」

山本が恭介を覗き込むと

「・・・」

恭介は黙り込んでしまった。

山本は、ふーっ息を吐いて、

「るみちゃんに、私から・・・」と話し出そうとした時、

「いいですよ。」

「えっ・・・」

「だいじょうぶですよ・・・」

そう言っつて恭介は立ち上がり、その場を去っていった。

一方、野村は、会社から少し離れた公園で一人途方にくれていた。

二人して、私を・・・と嘆いていた・・・

第14話 「けんか・・・」

山本は、とにかく野村と話さなければと野村に何度か声をかけようとした。

しかし

野村には無視されるような状態だった。

しばらくして

「はるかさん。ちょっと」

と声をかけてきたのは野村だった。

二人は、無言で歩き続け・・・

会社の近くの公園に来ていた・・・

「ごめんなさい・・・」

声を出したのは、山本だった。

その言葉を聞いて野村は、

「ごめんなさい？」と言った後、

「二人で、私を馬鹿にしたの？」

「そんなつもりはなかったの」

「じゃあ!! どういうつもりなの？」

「どういうつもりって。少しは私の話を聞いてよ!!」

山本も少し声をあげた。

「・・・」と疑うような目で山本を見る野村・・・

「あの時、久保君に2時にあの場所に行くように言ったの・・・」

「それで・・・？」

「その後、るみに・・・」

「それで、どうして間違えたわけ？あなたとわたし・・・」

信じられない顔をして、野村は続けた。

「そうして私を笑いものにしたのね・・・二人して・・・」

「るみちゃん、違っつてば・・・ただ、二人になる時間を作りたくて・・・」

「そんなことないわ・・・!」

野村はまったく聞こうとしない。

山本ももうどうしたらわかってくれるの?と困ってきた。

ある男が二人に近づいているとも気付かずに・・・

野村は腕を組んで、

「この間も、やけに親しそうだったし・・・」

「あれは・・・」

「それに、フランドで見かけた話をした時も、普通はもう少し・・・反応があっても?」

山本に問い詰めた・・・

「それは、関係ないでしょ!」と困ったように答える山本

「ひょっとして、金曜日合コンのあと・・・はるかさんとデートでも・・・」

野村は、怒りにまかし、言ってしまった。

山本は、しばらく黙り込んでしまった。

それを見た野村は、山本を覗き込んで

「あれ?・・・ひょっとして・・・?」と言おうとした時、

「はるか！」と大声がして、男性が近づいてきた。

そして

その男性は、山本を思いつきり抱きしめた・・・

目の前の光景を見て、野村は呆然とした・・・

第15話 「逃走・・・」

目の前で、抱き合う二人・・・

一体何なのと思ってばーと見ている野村・・・

「はるか・・・会いたかったよ」

そうつぶやき男性は、山本を抱きしめ続けた。

野村がよく見ると

山本は、野村の方を見て手をだして、何か助けを求めているようにも見えた。

それよりも

自分の話を折られたことを思い出し

われに返った野村は叫んだ

「ちょっと！！なにやってんのよ！！まだ話は終わってないわ。」

その声に驚いたのか男性の手が緩んだ、

山本は、その男性を突き飛ばし・・・

「いきなり何すんのよー！」

「それより、さっきの男の話・・・」

山本の言葉を見無視し、男性は聞きなおしてきた。

「あなたには、関係ないでしょ」

再び蚊帳の外に置かれた野村・・・

ふと男性を見るとものすごいハンサムなことに気付いた。

しかし

また自分を無視されたことに腹を立て・・・

二人の間に入った。

「ちょっと、あなた・・・まだ、私達の話は終わってっていないの。わかる？」

「いや。ひさしぶりに会ったもんだから。」

「そんなの関係ないわ・・・私のほうが先なの？」

「ところで。さっきのはるかた男性の話だけど・・・」

男性は、まだ話に食い下がる。

「哲也には関係ないでしょ!!--」

山本は、叫び

「るみちゃん、行きましょう」

野村の手を引いてその場所を離れようとした。

男性は山本の反対の手を引いて

「ちょっと待てよ！はるか」

山本は、振り返り、男性をにらみつけ・・・

「はなしてよ！」

そう言って、手を振りほどいた。

「いくわよ。」

野村の手を引いて歩く山本

「ちょっと・・・」

言いつつも野村はついて行った。

「待てよ」

まだ追いかける男性・・・

野村の手を引いたまま道路まで出てきて手を上げタクシーを待つ二人

そこに追いかけてきた男性・・・

目も前にタクシーが止まる・・・

乗り込む二人・・・

それでも男性は、山本に話しかけた。

「待てよ本当に・・・」

「あんだともう話すことは何もないの！」

そう言つて、山本はタクシーへ乗り込んだ。

「運転手さん出して」

ドアがぱたんと閉まりタクシーは出た。

タクシーに乗る二人・・・

しばらく、沈黙が続いた。

やがて、野村が口を開いた。

「さっきの人誰です？」

「・・・西村よ」

答える山本・・・驚きが野村を襲う

「あの人が西村さん？ だったらもつと・・・」

野村が山本の方を見ると・・・

山本は、涙を流して泣いていた。

そこへ戸惑った声で運転手が話しかけてきた。

「あのお客さん・・・」

「何ですか？」

運転手の言葉に不思議そうに答える野村

「走り出したはいいですけど・・・一体どこまで・・・」

「岡本駅まで・・・いいよね、るみちゃん」

山本は泣きながら答えた。

第16話 「記憶」

タクシーの中、二人は、黙ったままだった・・・

山本は、3ヶ月前の記憶が浮かんできた。

それは

1ヶ月ぶりに西村に会う日だった。

当然

前日から行く時間を連絡し

そして

この日は、西村の誕生日も

近いことから山本も張り切って、プレゼントを用意していた。

西村の部屋の前で、ひさしぶり会うことに緊張する山本・・・

部屋の扉を開け

「哲也さん。はいるわよ・・・」と声をかけた・・・

しかし

いつものような声が返ってこない。

おかしいと思った山本は、

「哲也さん……?」と部屋に入ってしまった。

すると、

そこには、

西村と見知らぬ女性がベットに寝ていた・

愕然とする山本……

しかし、

そこには、

許しがたい現実が目の前にあった。

「お客さん、着きましたよ」と言う声が山本を我に帰らせた。

タクシーを降りたのは、岡本駅の付近だった。

二人は駅に向かって歩いていった。

やがて

「ごめんねえ．．．るみちゃん．．．」と声をかける山本

「えっ．．．」と驚く野村．．．

「ただ、わたしは．．．あなたと久保君を．．．本当にごめんね．．．」

「そんなことより．．．」

「本当に悪気はなかったの信じて．．．」と言う山本に

野村は、一呼吸して「わかったわ．．．」

そして、

「そんなことより、本当に、さっきの人、ほつといてよかったんですか？」

山本は、ちらりと野村を見て．．．

「ありがとう．．．でも、いいの．．．」

「いって！」

「別れたの！」

「別れたって．．．」

「もう終わったの．．．」

「そう・・・」と言うと野村は、恭介と渡辺の姿を見つけた・・・
そして、

「はるかさん。ごめんなさい・・・」と離れようとする

「どうしたの？ るみちゃん！」

声をかけ、振り向く山本・・・

「今日は、すみませんでした・・・じゃあ」

野村は逃げるように去っていった。

「じゃあ って？一体どうしたのかしら？」

山本が振り向くとそこには、恭介と渡辺の姿が・・・

すると今度は

「恭介・・・こっちへ」

渡辺が恭介の手を引く

「どうしたんだ？ なべ？」と聞きなおす恭介

「おまえ・・・おるのか？おるんだな？じゃあ・・・」

渡辺はそそくさと逃げていった。

「じゃあつて。お前。逃げるな！　おい！」

恭介と言ったが・・・

渡辺は、行ってしまった。

「ったく、何だよ・・・」と恭介が振り返るとそこには山本がいた。

第17話 「近づく二人」

お互いを見つけた恭介と山本・・・

二人は気まずそうにしばらく向かい合った。

「こんばんは・・・」

声をかけたのは恭介のほうだった・・・

「こんばんは、ここで何してるの?」

「あつ・・・なべの奴とちよつと飲みに・・・」

恭介が言うと

一人しかいないことを確認し、

「渡辺君は?」

聞き返す山本

「あっちへ逃げていった・・・」

指で別の方向をさして

「そういつ、山本さんは?」

「わたしもさっきまで、るみちゃんと・・・」

「野村さんは？」

「逃げてったわ！久保君を見て・・・」

「なべも山本さんを見て、逃げてった・・・」

二人に笑みがこぼれた・・・

そこには両手を組んで話しかける普段の山本がいた

「久保君のおかげで、今日はひどい目にあっただわ。」

「そりゃないですよ・・・」

「何？それじゃ私が悪いとでも？」

「いえ」

「それにするみちゃんに説明するのに苦労したんだから・・・」

「すみません。」

「本当に・・・」

「ところで軽くどうです？」と恭介が誘う

「ひょっとして・・・誘ってるわけ？」

その言葉にしばらく考える恭介

そして

「今日は悪いと思って……」

「じゃあ……おごってくれるの？」

「はい……」

二人は、近所の居酒屋に消えた。

二人の光景を渡辺と野村は別々の場所で見ている……

生中が二杯とどいた。

「とりあえず……」と考え込む恭介

その際に

「久保君の失恋を記念して……かんぱーい」とグラスをあわす山本

「し……失恋って……」

恭介はそう言いながら目の前でおいしそうに飲む山本を見ていた。

「あゝおいしい！」と一口目を飲み、その余韻に浸る山本……

それをにこやかに見ている恭介。

「あれ？久保君・・・飲まないの？」

きよとんとした目で山本が言うと

「飲みます。」

と言ひ恭介は一口飲み

「ひどいじゃないですか。失恋って・・・」

恭介が情けない顔をした

「あらそうじゃない・・・どう見ても、もう挽回はできないわ」

山本はさらっと答えた。

「そんな身もふたもない・・・」とうなだれた。

「でも、久保君はついてるわよ」

「なぜです？」

「失恋の記念に私になくさめてもらえるなんて・・・」

と言ひ山本はふうーとため息をついた。

「どうしたんですか？」と聞く恭介

「どうなの？こんな美人を前に・・・」

「・・・それは、ありがたいですけど・・・」

「けど？」

「これって・・・傷口に塩を塗られているみたいで・・・」

「ちょっと・・・せめてアルコールで消毒してもらっているくらいと思わないよ。」

「アルコール消毒ですか・・・それはいい。」

それまで情けない顔をしていた恭介に笑みがこぼれた。

「そうよ。これが渡辺君だったら、どうなっていたことが。」

「そうだよなあ。明日には、失恋のうわさが会社中に流れてたかも」

「でも、わたしもしゃべっちゃっつかも」

「それだけのご勘弁を・・・」

それを見て、山本は再び、ふうーとため息をついた。

「どうしたんですか？なんかいつも・・・」

「いいじゃないの・・・」とまた溜め息をつく・・・

「ほら・・・また・・・」

じーっと見つめる恭介……

それに気付いた山本は

「なっ何よ！ そんなに見つめて」と少し恥ずかしそうに言い返す……

「そんなに大変だったんですか？俺のせい……」

「そのことじゃないわよ……」

山本がじっと今度は恭介を見つめ返す……

今度は、恭介が恥ずかしそうに「なんですか？急に見つめて……」

「そうねえ〜やっぱり、久保君をお……」と山本言おうとした瞬間。

「仲いいですね。お二人さん……」

野村が横から声をかけてきた。

第18話 「どたばた」

「るみちゃん……」

「野村さん……」

二人して声をかける。

野村は、二人を見て、

「やっぱり……」と話そうとすると

「まあまあ、立ち話もなんだから……るみちゃん、ここに座ってと席を動かす山本

「いいです。」

野村が断ろうとすると山本は、野村の手を引きほぼ無理やり座らせた。

そして、

「ちょうど、よかった。今、久保君に説教をしていたの。」と言つ山本

「うそでしょっっ。」

信じない野村は「じゃあ、何で見つめ合ってたの?」

その一言に二人がドキツとした。

「それは、・・・」

口を開く恭介・・・

それをじつと睨む野村

少しひるみながら恭介は続けた

「今日、迷惑をかけたんで、ここは俺が出すからと山本さんに言っ
てた時がちょうど見詰め合ってたように見えたんじゃない」

「どづいつこと?」

「おごつてくれる言うから、私が本当に?って再度確認してからじ
やないの?」

山本が辻褄を合わせた

いまいち納得がいかない野村だったが、

「まあいいでしょう?・・・ということは、私も同じだから、久保君
のおごり?」

「えっ?」と驚く恭介

「当然よ!」と突き放す山本・・・

「どづなの?」

「わかりました・・・。」としよぼんと答える恭介

「わかったわ、今日は、許すわ?」

「ありがとう、るみちゃん」と野村に抱きつく山本・・・

「ありがとう。」

恭介が言つと野村は恭介のほうを見て

「久保君は・・・それより先に言うことがないの?」

「えっ?」と

「私・・・相当傷ついたんだけど・・・。」

「ああ・・・今日は本当にすみませんでした。」

恭介は素直に謝った。

「るみちゃん。そろそろいいんじゃないの?」と声をかける山本

「ところで何で、二人がここにいるんですか?」

「あら～それは、るみちゃんのせいよ。」

「何で私が・・・」

不思議そうにしている野村

「よく言うわねあ．．．あなたが久保君を見て逃げるから．．．」

山本は野村のほうを見て続けた

「私．．．久保君とすごく気まずい状態になったんだから」

「それで何で二人が．．．」

「だから久保君のおごってくることになったの．．．」

「あっそうか．．．」

ようやく野村の納得した。

そして、飲み物の追加が届いた。

「じゃあ．．．再度、乾杯をしましょうか。」とグラスを持つ3人

「久保君の失恋を記念してカンパニーと再び乾杯した。」

3人が楽しそうにしているのを、渡辺は、少し離れたところから見ていた。

入りたいけど．．．どうしよう。と迷っていた。

「ところで、何で、久保君の失恋を記念なの？」と聞く野村に

「それはね．．．」と山本は、野村に耳打ちを始めた

「今日、どう見ても、るみちゃんに振られたからよ・・・」

「えっ・・・でも・・・」

「大体、見間違っなんて・・・もってのほかでしょ」

「そうだけど・・・」

「あゝ」

恭介が話の間に入ろうとすると

「うるさい。」と一蹴され

「いいんだ〜どうせ・・・」と少しいじけていた。

「だからなんで間違っ たか聞いてみない？」

「そうねえ〜」二人の耳打ちは終わった。

「ところで久保君？」

「はい。」と答える恭介・・・

「何で、はるかさんと私を間違えたの？」

「そっそれは・・・」と驚き、言葉を詰まらせる恭介・・・

「そんなに似ていたの私とはるかさん？」

「あつ・・・いやっ・・・その・・・後姿だけで・・・」とただ答えに困る恭介

「後姿つて・・・」

「だから、後ろ姿しか見ていないから・・・で皆制服だろ」と言い訳をする恭介

「後姿だけであんな間違いをするの？」

「すみません。」

「そうよ、どう見ても体型が違うじゃない。」と山本も参戦してきた。

あゝあどうしよう

ほんとうに

どうしたらいいんだ？

恭介はパニックになりながら。

「そうよ、わたし、こんなにお尻大きくないし・・・」と野村がいう

「お尻が大きいってなによ。ナイスバディといってほしいわ」と言い返す山本

おゝ神様〜どうしたらいいんでしょうか？

二人はにらみ合い同時に恭介を見て

「どうなの？」と脅迫した・・・

恭介は両手を合わし、「ごめんなさい・・・私が本当に悪いじゃないました。」

ただ謝るだけだった。

山本と野村は顔を合しふきだした。

そして、

「久保君もういいわ」と笑って言った

恭介は何のことだかわからないまま・

「はい・・・」と答えた。

そこへ「あの〜」と横から声がした。

3人を見るとそこには、渡辺の姿があった。

「なべ！！なんだよ〜今頃」

「みんな楽しそうだし・・・」

「あ〜この間、逃げた！ナンパ男！！」

指を刺しながら山本は言った。

「すみません。この間は……」

調子よく誤ろうとする渡辺……

「本当に、調子のいい奴だ……」

恭介は、動き席を空けた。

そこに座り込む渡辺、そこに飲み物が来たのを見た山本は、

「さて、渡辺君も着たし。乾杯をしましょうか？」

「何回するんですか？」と恭介が聞くと

「いいじゃない。」と答え

「渡辺君のおごりに乾杯！」

「乾杯！」と3人が言う。

「えっ……ええ??」と驚く渡辺……

「そんな……」と嘆いていると

「うそよ……渡辺君は自分の分だけ払ってね。」と優しく言う野村……

「あ〜」と声を挟もうとする恭介を見て

「あのこと・・・」という山本にびくつとなり恭介は話をやめた。

「ところで、山本さん」と切り出した渡辺は

「この間一緒にいた。きれいな人・・・」と言い出したのだ。

「なに？きれいな人？ここにいるじゃない・・・二人も」と話す山本に

「今日じゃなくて、この間・・・二人で歩いてた。もう一人の娘」と渡辺は、もう一度聞きなおした。

それを聞いた、山本はにやりとしていた。

一方、

恭介は、少し頭が痛くなった・・・

そして、

うつむいて、チューハイを口にしていた。

「はるかさん？この間のかわいい人って？ひよっとして。恭子さん？」と野村が聞くと

「恭子さんって言うんですか」と調子よく聞く渡辺・・・

「恭子がどうしたの？」山本は、何気なく聞いた。

「実は、もしよければ、紹介してくれませんか」と言った瞬間、

げほげほつと咳き込む恭介・・・

はあくという顔をした後、

その光景を見て「何むせてんのよ、久保君!!」と笑う山本

「久保君!大丈夫?」と心配する野村

そして

その光景に呆然とする渡辺がいた・・・

「恭子は無理よ。」と山本がいい

「そろそろお開きにしましょう。」

第19話 「再会」

「恭介！知ってるか？」

それが渡辺の一言目だった。

「何を？」

「今度、俺の部署にきた新任の上司」

「で？」

「それが・・・あの山本さんの恋人らしいんだ。どうだ。いい情報だろっ」

渡辺がえらく張り切って話してきた。

きよとんとしているように見える恭介。

内心、少し穏やかではなかった・・・

「何だ、興味ないんか？」

「ああ・・・」

「なんだ・・・つまんねえ・・・」

声のトーンが落ちる渡辺・・・

「なべ……」

「なんだよ」

「いや、なんでもない……」

「どうしたんだ。やけに元気ねえけど……」

「いや……なんでもないよ……じゃあ」

恭介は渡辺と別れた。

恭介は自販機の前でぼーっと座っていた。

「あつ……久保君……」

山本が現れ、コーヒーをを買って恭介の横に座った。

「あのさ、渡辺君どうにかならない？」

「えっ？なべが何か？」と驚く恭介

「会う度に、恭子ちゃん、恭子ちゃんってうるさいの、同期なんですよ。何とかしてよ」

山本は少しあきれた感じで話してきた。

「俺に何ができるんです？」

「いつそのことあなたって、言いましょつか？」

「それだけのご勘弁を」

「じゃあ・・・」

「本当は、人妻だつてことにしたら？」

「うん」と考え込む山本、

それを見て、恭介は

「何を考え込んでんですか？」

「いや・・・久保君が・・・」

「あ」と恭介が大声をあげた

「何、大声あげてんのよ。」

「変な想像しないでくださいよ。」

「そうね・・・」

今度は、恭介が

「そういえば、この間、最後に何を言おうとしてたんです？」

「何をつて？」

ワザとらしく答えようとしなない山本に

「野村さんが、来る前に何か言おうとしてたじゃないですか。」

山本は、これは言えないと思い。

話題をそらすことに懸命だった。

「あつ……ところであるみちゃんどうするのよ。」と反対聞き返した。

「たく……もう……と少しふてくされる恭介そして

「あきらめようと思ってます。」

「はあ」と驚いた顔の山本

「なんで、あきらめるの?」

まじまじと恭介の顔を見る山本。

「この間、失恋記念日って……しかも、野村さんの前で……」

「ああ……そんな理由であきらめるの?」

話をしようとしたら人が入ってきた。

「屋上へ行かない?」と二人は屋上へ行った。

「久保君、ここで待ってて。今からるみちゃんを呼んでくるから。」

「呼んでくるって。今すぐか？」

「そつよ善は急げってね。」

「それって使い方違うし・・・」

「なによ。使い方くらい・・・」

「急に！、心の準備が・・・」

「いい大人が、何が心の準備よ・・・呼んでくるから、その間に準備しなさい。」

山本は、出口の方へ向かった。

行ってしまった出口を見ている恭介・・・

山本が出口に入ってからまもなく・・・

後ずさりして出てくる山本の姿が見えた。

そして

山本の前には、恭介が見知らぬ男性が

「はるか・・・こんな所にいたんだね」と声をかけていた。

第20話 「うそ」

後ずさりをする山本・・・

その前に

近づこうとする見知らぬ男。

山本の姿から嫌がっているのが恭介にはわかった。

そして

その男が別れた相手であることも・・・

「ちゃんと話そう・・・」とその男が言う

ただ黙って後ずさりをする山本、

「もう一度やり直せないか？」

とにじり寄る男・・・

二人は少しずつ恭介の方に近づいてきた。

山本のどんと背中になにかが当たった。

振り向くとそこには恭介が立っていた。

「どうしたんだ。はるかさん・・・そんな顔をして」

とやさしく話しかけ、恭介は、山本の前に立った。

男は戸惑いながら

「何だ、お前？」

「誰だっついていいだろ。」

「はるかとはどんな関係だ。」

「あんたと関係ないだろ。はるかさんが嫌がってるじゃないか。」

男は驚いたように二人を見ていた。

「はるかさん・・・行く」

恭介が山本を出口の方へ引いて行くこうすると

「まて！俺は、はるかに話があるんだ」

山本の手を引っ張る。

「話すことなんて何も無いわ。西村さん」と手を振り払う山本

「はるか・・・」

山本の方をさびしそつに見る西村

「もう・・・終わったのよ。私達・・・」

「やり直さないか？」

「もう……無理よ……」

山本は、西村から目を離し、

「久保君……行きましょ。」

二人は、西村を残して出口に行った。

西村は、困惑した表情のまま

「くそっ」

とつぶやき空を見上げた。

どきどきしながら階段を駆け下りる二人……

お互いの手はしっかりと握られていた。

下の階に着いた二人、少し息が上がっていた。

「ありがとう……」

山本は恭介の方を向いて話した

「助かったわ……」

「どういたしまして……」

笑顔を見せる恭介に、笑顔で返す山本・・・

「よくあんなこと、言えたわね。」

「俺もよくとっさに出たな〜と・・・」

「とにかくありがとう・・・」

お互いを見ているうちに手をつないでることを思い出し

ぱっと手を離す・・・

しばらく無言で違う方向を見て・・・

並んでいる二人。

「あ〜」

お互い話しかけようしたところへ野村が現れ

「どうしたんですか。こんなところで・・・」

と話しかけてきた。

どきつとする二人・・・

「別に・・・たまたま、会っただけよ」と切り返す山本

「じゃあ、野村さん。山本さん・・・」とそそくさと逃げる恭介

「るみちゃん、わたし行かないと・・・」と野村を置いて、山本も逃げた。

なんかへんねえと野村は思っていると

階段から浮かない顔をした西村が降りてきた。

「こんにちは」と挨拶しすれ違ったとき野村は、

この人この間・・・

会った人だと思い出し、とっさに隠れた。

第21話 「それぞれ」

それぞれ自分の机に戻った。

西村は。シヨックを受けていた。

たった3ヶ月で、新しい彼ができていたことに、

ふと、渡辺に恭介のことを聞いてみた。

山本はまず恭介にお礼と今晚ピッコロで打合せしようとするメールしている。と野村がやってきた。

その表情は、なにやら不安げにも見えた。

「あら、るみちゃんどうしたの？」

野村は、山本の横に近づき小声で聞いた。

「何かあったんですか？」

「えっ・・・なんで？」

「だって・・・二人の後に、あの人而降りてきたの・・・くらい表情で・・・」

「あの人って？」

「あの日に途中で入ってきた人よ。」

山本は少し驚いた顔をしたが、

「ああ・・・西村さんのこと？」

「で？ どうなったんですか？」

不安そうに野村は聞いてきた。

「ごごじゃ・・・ちよっと・・・」と答えをはぐらかした。

野村は、「また、後にします・・・」と去っていった。

そのころ

恭介のメールがなった。

誰だろうと見ると山本からだった

今日のお礼とピッコロに来てという内容だった。

そこへ

「恭介！！」と声をかけてきたのは、渡辺だった

「なんだよ。なべ・・・」と携帯を隠した

「どうした。携帯を隠して。メールか？」と覗き込もうとする。

目ざとい奴だなと思いつつ……

「何でもないよ。」

「今晚どうだ？」

「今晚？ちよつと無理……」

「何だよ……またかよ。そのメールか？」

渡辺は、恭介の携帯をとろうとした。

「やめる……」

「あつ……それと、この間、新任の上司の話したろう。」

携帯をとることをあきらめた渡辺は、思い出したかのように話した。

「ああ……」

「お前なんかしたんか？」

「何が？」

「お前のことをやけに聞いてきたぞ……」

「で……なんていったんだ？」

「彼女もできない情けない奴だと」

「1」の。そのほかは？」

「それと山本さんとの関係にも聞いていたなあ？」

「そんなことを？」

「ああ・・・変だよな。どう見ても恭介と山本さんだと。女王様と召使だもんな・・・」

恭介はあきれたが「そう答えたんか？」と聞くと

「ああ・・・」

逆にその答えにほっとした。

第22話 「しゅめん」

「るみちゃん……ごめん……」

手を合わせあやまる山本……

「はるかさん、どうしたんですか？」

戸惑う野村。

仕事が終わって

山本は野村を近くの喫茶店に呼んでいた。

山本の第一声が、それだった。

「実は……」と話を続ける山本。

「えっ……！」と驚きの声を上げた。

「しっ……！るみちゃん、声大きいわよ。」

「じゃあ、たまたまいた久保君を彼氏だと……」

しばらく、あきれた表情の野村……

少ししてわれに返った。

「でも、はるかさん」

「はい？」

「本当に久保君とは、何も無いんですか？」

「なっ何よ・・・急に・・・」

「最近・・・お二人さんの仲がいいところを見かけるんで・・・」

「私・・・るみちゃんに会わせるのに苦労してるのに・・・」

けっこう慌てる山本をみて

「はるかさんってかわいいですね・・・」

「もっつ！からかってるの?」

すこし山本の反応を見て楽しんだ野村は、

「まあ、いいわ。ところで、どっつするつもり?」

聞き返した。

「それよ、問題は・・・」と山本は考え込んでしまった。

「えっ!?!、ひょっとして考えていなかったの?」

と驚く野村に

コクリとうなづく山本。

「信じられない」と声をあげた野村だったが、

「とりあえず、二人が付き合っている振りして……」と言ったものの

その後が思い浮かばない。

それを見た山本

「あと、どうしたらいいか……わからないのよ。」
とため息をついた。

「ところで、肝心の久保君は？」

野村は思い出したかのように言った。

「そういえば、遅いわね……ここに来るように言ったのに……」

その頃

恭介は、ピッコロに向かっていたが、渡辺がついてきていた。

「なべ、何でついて来んだよ……」と振り返って聞くと

「いや、俺の前をお前が歩いてるんだよ。」

「つけてるだろ・・・」

「いや？」とどう見ても目が笑っている渡辺、

そして

恭介の行動を監視しているのは見るからにわかった。

「何のまねだ？」

「いや」

そして

しばらく歩いて

片手でメールを打っていた。

「ごめんなさい。今、行けそうにない・・・」

第23話「おてんぱんじょん」

山本のメールになる。

それを見て

「何ですって。」

と山本が驚く

「どうしたんですか。はるかさん。」

「久保君・・・来れないって」

ガクツとなる山本、一体何なのよあいつとあせっていたら

「何で、はるかさんが、久保君のメアド知ってるの？」

少し怒り気味で聞いた・・・

「ああ・・・、さつき階段の下で会ったじゃない・・・あの時・・・」

「だから、少し二人とも」

「変だったでしょ・・・」

山本は、ソファーに深くもたれかけ、天井を見上げた。

「どろろじょんじょん・・・」とつぶやく

「はるかさん・・・本人来ないと・・・」

野村もどうしたらいいか、わからない状態だった。

それより焦ってのは、恭介だった、

渡辺があまりにもしつこかったからだ。

あれこれうるうるしているうちに

ふと

渡辺でも入りにくいところを思い出した。

携帯を手にした恭介「もしも・・・」と話し出した。

近くにくる渡辺を無視して、足早に歩きながら

「あっ・・・勇氣さん？今フランに入れる」

「いいよ、あいてるよ・・・」

「今から行くから・・・」

「でも、今日は忙しいから。」

「ちょっと、寄るだけだから……あとは、着いてから話します。じゃあ」

とフランへ向かった。

途中

「フランへ向かう、しばしお待ちを」とメールした。

「何でフランなの？」と驚く山本、

「えっ……フランにいるんですか？久保君？ どうします？」と
反応する野村

「どうするって、待ってってあるし……」

二人は、待つしかなかった。

その頃、フランに着いた恭介

「いらっしやい」と迎える勇気……

「ごめん……今日は、変な奴に付きまとわれて」

「なに、変や奴……追い返そうか」

「いや……会社の同僚なんだ……」

「また、ややこしい。まあ、とにかく奥へ」

その頃、フランの前で渡辺は、困っていた。

まったく知らない美容院へ恭介が入って行ったからだった。

しかし

勇気ある渡辺は、その美容院へはいった。

入った瞬間

女性しか見当たらなかった

しかも

不思議そうにみんな渡辺を見ている。

これは・・・

ひよっとして・・・

間違えたかな。

と焦る渡辺・・・

「いらっしやい。」と迎えたのは勇気だった。

「あゝ」と言葉を濁す渡辺・・・

一体どうしたらいいんだ？と心で叫んでいた。

その隙に、恭介は、裏口から出て行った。

第24話 「ふう〜」

何とかピツコロに無事着いた恭介・・・

席に行くと

「えっ・・・」と驚く・・・

なんで野村さんまでいるんだ

その驚きの表情を見た野村は、「お邪魔なんで・・・」と立ち去ろうとした

「待つて。」と止める山本・・・

「いいからそこに座りなさい。二人して・・・」と無理やり二人を座らせる山本

「ところで・・・」と聞こうとする恭介に

「まって、」と話をさえぎり「何で、るみちゃんがここにいるんですしょう?」

と言って話を続けた。

「今回は、るみちゃんの協力があるの。それと、このこと知っているのは、私達3人だけだから。」

「とじろでどじろするの。」と野村が聞くと

「久保君はフランへ行っただんでしょ。」

「はい。」

「るみちゃんは、フランは、男性客のコーディネートをしている」とを、渡辺に聞かれたら言う。」

「はい。」

「それと金曜の晩に、デートでもする？」と唐突に山本が話した。た。

「えっ……デート……ですか？」

この言葉にかなり動揺する恭介……

時々、野村をチラッと見ながら困惑の表情を隠せなかった。

「あんなこと言ったんだから、金曜にしないと」

「そうよ、不自然に思われるわ……」と野村が言う。

「野村さんまで……」と困惑する恭介に

「るみちゃん、久保君をしばらく借りるから。」と山本が言う

「いいですよ、はるかさん。ずーっと借りてて」と冗談ぽく言う野村……

「大丈夫よ・・・ちゃんと返すから、これが終わったら、久保君と二人で、デートなり何なりうまくやってね。」

野村に気を使う山本に、蚊帳の外の恭介、俺は、品物か？と思いつつ・・・

「まあ、それは、あとで考えますから。がんばってくださいね・・・はるかさん」

野村はその場を去って行った

「これからどうする？」と山本が聞いてきたので、

「とりあえず飯でもどうです？」と二人で喫茶店を出た

その時、渡辺は、さっきは、ひどい目にあっただなと独り言を言いながら歩いていると偶然二人を見つけた。

「まだ、ついてるねえ」と今度は二人の後をつけ出した。

「とりあえず、楽しみましょう」と言い出したのは山本だった。

「そうですね・・・」

と二人の時間を楽しんだ。

店を出ると急に恭介が山本の手をつかんだ

「どうしたの？」と聞くと

「なべの奴がついて来てる。」

「そう。」と山本が寄り添ってきた。

そして

「腕組む？」と聞いてきた。

恭介はしばらく考えてると山本がそつと腕を組んできた。

街頭がまばらに照らす中、二人は寄り添って歩いた。

そして

「今日は楽しかったわ。じゃあ！」と山本が手を上げて言つと

「じゃあ。後で連絡するから。」と二人は別れた。

「ふうう」と恭介は息を掃いた。

長い一日だった。

第25話 「もう一度・・・」

渡辺の報告を聞いた西村。

それでも西村は山本のことがあきらめられなかった。

そして

堂々と山本の前に現れ、「ちょっといいか・・・」と呼び出した。

しかたなく山本は、西村について屋上に行った。

その頃

野村は恭介の所に行った。

そして、

「はるかさん・・・西村さんに呼ばれて行きましたよ・・・」

「野村さん。それっ・・・本当？」立ち上がり野村の方へ詰め寄る恭介

「まあ・・・」

「でっ？」

「でっつて？」

「どこだ？」

「たぶん屋上よ・・・早く行きなさいよ。」

「ありがとう・・・」と恭介は屋上へ走り出した。

その光景を見た野村は、お〜お〜青春してるねえ〜と思った。

屋上についた二人・・・

「西村さん、何か・・・早く戻りたいんですけど。」

と切り出す山本

「もう一度・・・やり直せないか？」

「また、それですか？この間、言いましたよね。」

それを聞いて、西村は、必死の形相で言った。

「だから、もう一度、考え直してくれないか？」

「どうやって？考え直せって言うの、あんなこととして・・・」

と腕を組んで、怒り出した山本・・・

「あれは、俺が悪かった・・・魔が差したんだよ・・・魔が」

と必死に弁明する西村

「魔が差した？・・・」

「ああ・・・だから本当にあの時はどうかしていたんだ。」

「私が行く日に、女と寝てて？」

西村は、山本の前で土下座をして

「ごめん・・・本当にこの通りだ・・・もう一度、俺にチャンスを・・・」

その光景は、山本も驚いたが、

「終わった理由は、それだけじゃないわ。」

その言葉を聞いて西村は切れた・・・

すくつと立ち上がり無言で山本に近づき・・・

「この〜」と手を振りかざした。

バチーンという音と共に「きゃっ・・・」と山本が倒れる・・・

「何するの?」と言うと西村は再び無言で近づき、

手を振りかざした瞬間

「きゃっ・・・」と目を閉じ身構える山本、

バチーンという音がした・・・

しかし

衝撃はなかった。

そつと

目を開けるとそこには恭介が楯となつて
変わりに殴られていた。

「はるかさん・・・今のうちに逃げる・・・」と恭介が西村の前に立ち
はだかった。

「貴様、じゃまするな！」

西村はそこへ続けざまに2、3発殴つた。

それに、ただ耐える恭介・・・

「やめてよー！」

恭介の後ろで、叫ぶ山本・・・

しばらくして

西村は無抵抗な恭介を殴るのをやめ

「くそつ・・・」とその場を去つて行つた。

残された二人・・・

二人は、近くの段差に向かい合い腰掛けた。

「大丈夫？」と口から少し血を出している恭介を心配する山本

「大丈夫ですよ。少し口切ったぐらい。はるかさんこそ・・・」

ほほを少し赤く腫らしている山本を心配する恭介

「だいじょうぶよ・・・ありがとう・・・」

山本は、ハンカチを手に恭介の口元を拭いた。

二人の様子が気になった野村・・・

上へ上がるうか迷っていると西村が階段をかけ降りて行った、

何かあったのではと、屋上へ上がる野村・・・

そこには、向かい合って座る二人の姿・・・

それを見て野村は、やっぱり・・・

ときびしそくに階段を降りて行った。

そして、山本が西村と本当に別れた理由を語りだした。

第26話 「ふたり・・・」

向い合っている二人・・・

「彼をみたでしょ・・・」

ポツリと話し出した山本

普段の気が強くて怖い彼女の姿はそこにはなかった。

そして

続けた。

「彼は、ああやって、不都合なことが起こると暴力をふるうの・・・
付き合いだして、半年ぐらいになったある日、些細なことで喧嘩に・・・

その時からだったわ。

最初は、

優しい彼が、急に豹変し、私を殴り飛ばしたの・・・

そのときは、すぐに正気になって、ごめんと私を暖かく包み込んでくれた・・・

それから、

次第に、特に遠距離恋愛になって、エスカレートして行った。

そして、

3ヶ月前、彼の家に行ったの、

そこには女の人が、それを見られた彼は、

私とその女の両方に暴力を振るつたの・・・

それが怖くって・・・

ついに、

携帯で別れを告げたの・・・

しかも、

引越した後に・・・」

山本は、

ポロリ・・・

ポロリ・・・

と涙を流した・・・

それを見た恭介は、両手で山本を抱え込み・・・

耳元でつぶやいた

「大丈夫……もう……大丈夫……」

山本は、恭介の腕の中で泣いた……

しばらくして、

落ち着いた山本は、「ありがとう……」と涙をぬぐい、顔を上げた
そこには、傷ついた顔の恭介がいた。

それをみて……「ひどい顔……」と一言……

「そんな言い方しなくても……」と少しむくれる恭介……

「でも……ありがとう……」と言った瞬間、

すっと彼女の唇が恭介の唇とかさなった。……

やがて唇が離れた後、

山本はわれにかえって、立ち上がり、そそくさと恭介の前から逃げるように去った。

屋上には、恭介が残っていた。呆然とした表情で……

山本は、自分がしたことを思い出し……階段を駆け下りて行った。

思わずキスを・・・うわ～どうしよう・・・と自分でも・・・混乱しながら・・・

階段を下りるとそこには、野村が待っていた。

野村も焦っていた・・・ひよっとして・・・久保君は、このまま、はるかさんと。

「はるかさん・・・」と声をかけられ山本は、野村がいたのにはじめて気付いた。

「あ・・・るみちゃん・・・」と少しぎこちなく話す山本・・・

その姿を見て、口元に気付いた野村が

「口紅・・・」と言うと

思わずハンカチを口元にあて「こ・・・これは・・・」

「ふ～ん」と山本の顔を見るとほほがかすかに赤く腫れていた。

「どうしたんですか？その顔・・・」と驚く野村

「ちょっとね・・・」と今度は、ほほを隠す山本

「どうしたんですか？」

「屋上で・・・ちょっと・・・口紅もこの傷と一緒に・・・」

「一体、何があったんですかはるかさん・・・久保君と向き合ってた

でしょう。」

山本は、あきらめてホントのことを言った。

「西村さんが・・・きれて・・・」

「えっ・・・殴ってきたの？・・・信じられない・・・」

両手を口にあて、驚く野村・・・

「それで・・・久保君の傷を少し拭いてたの・・・」

「そうだったんですか・・・」

野村はため息をついて覚悟を決めた。

「ところで、はるかさん。」

「なによ。いきなり改まって。」

「この間・・・久保君・・・返すって言ってましたよね・・・」

「ええ・・・」

「今度の土曜日。いいかな？・・・」

「たぶん・・・大丈夫だと・・・思う」

「なぜ？多分なんですか？」

「明日、無事終わればね・・・」

「そうですねえ・・・」

恭介は、自販機の前にいた。

「いてえな〜 もう」とコップを片手に天井を見ていた・・・

「久保君・・・」と声をかけたのは、

ふと見るとそこには、野村が立っていた。

「野村さん・・・どうして？」

恭介の顔を見て「どうしたの？この顔・・・」

「いや・・・なんでもない・・・」

「そう・・・」と野村がうつむいた。そして

「土曜日なんだけど・・・あいてる？」

「えっ・・・でも・・・山本さんと・・・」恭介は困った・・・

山本さんのこともあるし・・・

「あっ・・・山本さんには許可もらったから・・・」

「そうなんだ・・・」

「じゃあ・・・10時に駅前で・・・」

「えっ・・・あっ・・・」と恭介が何かを言う前に野村はそこ場を去った。

どこの駅前で？だらうと

第27話 「え？」

「はるかさん！」

大声で走ってきた野村

「るみちゃん？どうしたの？そんなに大声を出して？」

不思議そうに聞く、山本・・・

「大変よ・・・大変・・・」

「だから何が大変なの！？ ひょっとして・・・西村さんと久保君のこと？」

「ちがいますよ。明日のこと。あした。」

「えっ・・・じゃあ・・・久保君とのデートのこと？」

山本は、明日のデートを楽しみにしていた。

「もっつー！！」と怒り出す野村に

「どうしたのよ、るみちゃん・・・ほんとつに・・・」

一生懸命なだめる山本

「合コンよ。合コン・・・」

「あつ……！」と驚く山本、さっきまでのうれしそうな顔は消えていた。

「忘れてた……」

「完全に忘れてたでしょう。」と野村が追い討ちをかける

「でも……まだ、誰かいないの私の代わり……」と聞くと

「それが……」と少し声のトーンを下げ気味に……

「えっ。あやかも来ないの？恵子は？」

「恵子さんは来るそうです……」

「じゃあ、二人だけ？」

「そうです……どうしよう……ところで、恭子さんは無理？」

「難しいかも……」

「キャンセルしようか？」

「いや、待って、何とかしてみる。」

と携帯を取り出し、メールした。

メールを受けた恭介は驚いた。「えっ……」

しばらくして

返信が届いた。

「わかりました。」と

「るみちゃん、恭子、来れるって。」とメールを見た喜んで言った。

「でもあと一人・・・」

「ちょっとまって、るみちゃん、フランにかけてみるわ・・・」

山本が連絡すると勇気が出たそして、「えっ・・・全員駄目・・・」

「僕じゃ駄目？」と勇気が面白半分に言ってみた。

「えっ!?! ひょっとして・・・」

「そう、1回行って見たかったから・・・」

「でも、女性側よ。って、勇気ちゃんだったら大丈夫か。」

「ちょっと待って、一応確認取るから・・・」

携帯のマイクを伏せ

「るみちゃん・・・勇気ちゃんが出てくれるみたいだけど・・・駄目？」

「勇気ちゃんって。あの？男の子でしょ？・・・でもお・・・」
「としては
らく野村は考え

「いいわ・・・今回は、これで行きましょう・・・」

「久保君」

翌日、恭介は山本に呼び止められた。

「あっ・・・山本さん。何か？」

「今日のこと・・・ありがとね・・・」

「いや・・・」と少し照れる恭介

山本は、少しうつむいて

「明日、るみちゃんとがんばってね。」

「えっ？」と恭介は驚いた。

しかし、山本は、「じゃあ」とその場を去った。

恭介は通りすがりに野村に声をかけた。

「野村さん・・・ちょっと、」

二人は、自販機の前にはいた。

野村は、やはり無理かも・・・と半分あきらめていた。

「とじろで・・・明日のことだけど・・・」

「はい」と少し気落ちした返答をした。

「どこの駅に行けばいいの？」

「あっ・・・」

来てくれるんだと言う喜び半分、失敗したことの恥ずかしさ半分、野村は少し赤くなった。

「じゃあ、岡本駅でいい？」

「いいよ。」

念のためお互い携帯番号を交換した。

そして、恭介は昼から早退した。

山本と野村そして同僚の安達は、二人を待っていた。

「はるかさん・・・今日・・・すみませんでした・・・」

「いいのよ・・・で、明日は、久保君とデートするの？」

山本は聞きなおした。

「うん・・・」

うつむく野村

「よかったね・・・」

肘で野村を押す山本

そこへ、恭子と勇気がやってきた。

「ごめんなさい。遅くなって・・・」

謝る恭子と勇気

「いいの・・・勇気ちゃん・恭子ちゃん、私達今来たところだから・・・」

笑いながら言葉を返す山本・・・

この日、野村がやや緊張していた・・・もし勇気ちゃんが男だとはれたら・・・と

しかし、野村はまだ知らなかった。恭子が恭介だと・・・知っていたのは、山本と勇気だけだった。

合コンはというと最悪だった。オタクっぽい奴とその中にちょっといけそうな奴が一人・・・

しかし、そいつは、仕事の自慢ばかり・・・

そんな中、一生懸命盛り上げていたのは、他ならぬ恭子と勇気だった。

第28話 「しっくいやし」

合コンが終わって、恭介と勇気そして山本の3人が同じ方向に歩いていた。

勇気が聞いてきた

「あんなものなの・・・」

「今日は、ちょっと・・・」

少し渋い表情を見せた山本・・・

「あつ・・・そうなんだ・・・まあ・・・いいや、楽しめたから」

あっけらかんとしている勇気

そこへ

「おい・・・」

男の声でした・・・

恭介と山本は頭痛がした・・・

目の前には西村と渡辺が立っていたからだった。

前の二人を見て勇気が聞いてきた

「どつする・・・」

「無視よ・・・無視・・・」

小声で山本が話す。

「そうしましょう・・・」

うなずく恭介・・・

3人は何事もなかったかのように2人を避けて行こうとした。

「待てよ。」

言う西村の声を無視して、3人は歩く・・・

西村より先に恭介の手を握って渡辺は声をかけてきた・・・

「待ってよ彼女」

きもちわる〜と思いながら恭介が手を振りほどこうとするが放さない渡辺・・・

「放してよ!」

勘弁してくれ〜と思いつている

「ねえ、一度でいいから。ね、ね」

しつこく話す渡辺……

恭介は、仕方がない痛い目に合すかと思っていると……

「やめなさいよ！」

勇氣の声と共に、恭介を握っていた手をひねった。

「イタタ……何すんだ。このアマ」

渡辺はその手を振りほどき、今度は勇氣の手を取ろうとした瞬間、

渡辺は宙を舞った。

ドスンという音とともに、しりもちをつく渡辺……

「ありがとう……」

恭介がと勇氣に言って山本を見る

今度は西村が山本の手を引っ張っていた。

「ちょっと来い！」

「やめてよ……！」

抵抗する山本、

一方

勇気は渡辺の手をひねってて動けなかった。

もう・・・と、ツカツカツカと歩いて西村に近づく恭介・・・

何だこいつと西村が思っていると

「その手を離さないよ！嫌がってるでしょ・・・」

忠告する恭介

「何だ！このアマア！」

山本の手を離さない西村・・・

「恭子ちゃん・・・近づかないで・・・」

叫ぶ山本を無視して、ガツと西村の手を掴む恭介・・・

手をつかまれた西村は

「何のまねだ！」

「いい加減にしなさいよ。」

すう恭介が言った瞬間、

今度は、西村が宙を舞った。

投げられた二人・・・

驚き慌てふためいて逃げて行った。

山本は、二人を見て

「ありがとう・・・二人とも」

「ひょっとして、・・・二人とも何か・・・やってたの」

「合気道を・・・」

恭介と同時に二人が言った。

「じゃあ・・・」

勇気が帰ろうとすると恭介が手を握る

「あっ・・・」

思い出す勇気、すぐに携帯で連絡した

しかし勇気は、うつむいた

「駄目だ・・・もうしまってる・・・」

がっかりする恭介・・・

「今日はありがとう」

「じゃあ・・・俺はここで」

二人を残して帰る勇氣。

そして

恭介と山本だけが残った。

結局

恭介は山本へお願いした。

「いいわよ・・・うち来る？」

一方

西村と渡辺は、

「さつきはひどい目にあつたな・・・」

「本当です・・・女に投げ飛ばされるなんて・・・」

渡辺は頭を抱えた、そして、西村に聞いた。

「ところで、これからどうされるんですか？」

「おれか？・・・はるかの家に行って・・・話をしてくる。」

西村は、これで、駄目なら・・・と山本の家に向かった。

その頃、恭介と山本は彼女の家についた。

そして

恭介は、洗面所で化粧を落としていた。

すると

外からおとこの声が聞こえた。

恭介が洗面所から出ると・・・

玄関先で山本が誰かともめていた・・・

着替えを済ませた恭介は何気なく洗面所を出た。

「いい加減にしてよ！！人の家まで押しかけて・・・」

「なあ・・・俺の話をもう一度・・・もう一度聞いてくれお願いだ・・・」

「何言ってるのよ。この間も殴ったくせに・・・」

「だから、悪かったって言ってるだろ・・・」

そこには、西村がいた。

恭介は、本当にしつこいな・・・と思いつつ・・・洗面所から出て行った。

「はるかさん？どうしたの・・・」

そして

山本の横に並んで彼女の肩を抱く恭介・・・

それを見て愕然とすし悲しい顔をする西村・・・

「はるか・・・」

「こつという関係だから・・・もう・・・わかったでしょ・・・かえって！」

山本は西村を部屋から追い出した。

西村は、肩を落として帰った。

第29話 「それぞれの思い」

肩を落としてマンションをでる西村・・・

少し離れ振り返り、もう一度山本の住む階を見上げ

「は〜」とため息をはき、そのマンションを背に歩き出した。

それを見ていた恭介

恭介を後ろから山本は訪ねた。

「行つた？」

「うん。行つた。」

にこやかに答える恭介。

「本当？」

再度、聞きなおす山本

「本当に・・・」

「やった!!!」

山本は、声を上げ恭介の両手をつかんだ。

「やった。やった」

二人はハイタッチをし、

そして

抱き合って喜び・・・

二人は、思わず軽くキスをしてしまった。

「あっ・・・」

うつむく二人・・・

二人は視線を上げた。

しばらく

見つめ合う・・・

気付くと手をつないだままだった。

二人はぱっと手を離し後ろを振り向いた。

そして

「あした・・・」

そう言おうとした瞬間だった。

恭介は、思わず後ろから山本を抱きしめた。

しばらく黙る二人……

山本もこのまま……そう思っていた時、野村の顔が浮かんできた。

「……明日、るみちゃんと約束でしょ……」

恭介はわれにかえった。

そして

抱きしめていた手が緩んだ

山本は、その手をほどいて振り向いて。

「しっかりね……」

「ああ……」

恭介は、さびしそうに洗面所に戻り、荷物を取ってきた。

靴を履き山本へ向かって

「山本さん……じゃあ……帰ります。」

そう言い振り向く恭介。

その背中を見て……

山本は彼の背中に思わず抱きついてしまった。

「や……やまもと……さん？」

驚く恭介

山本は行かないで……と言いつづけた言葉を飲み込み

「ありがとう……いろいろと……」

そして、

「山本さん？」

恭介は、体を動かし振り向こうとすると

「振り向かないで……」

今振り向かれたら、

彼を見送れない……

「やまもとさ……」

恭介は身動きがとれず、そう言った時だった。

「本当にありがとう。気をつけてね……」

そういう言葉と共にスーツと山本の手が恭介から力なく離れた。

しばらくして

「はい・・・山本さんこそ」

恭介の言葉を最後に扉が閉まった。

中に残った山本の目から涙がこぼれた・・・

そして

玄関先にへたり込み・・・

一人泣いていた・・・

振り返ってほしかった・・・

とぼとぼ歩く恭介・・・

俺は？

どうしたんだ・・・

しばらく立ち止まった恭介・・・

もどりたい・・・しばらく考えた恭介だったが

再び歩き出した。

一方、西村は、渡辺と居酒屋で飲んでいた。

「西村さん……とりあえず、どうします」と

「生中で……」

「店員さん、生中二つ！」と渡辺が注文する。

「ところで、久保を知ってるだろう。」

「はい……」

「あいつと付き合ってるんだ。」

「えっ？」

驚く渡辺

「だから、はるかが、久保って奴と付き合ってるんだ。」

「え〜!!、あの軟弱な恭介と……山本さんが？」

あまりもの驚きに大声をあげる渡辺……

そこへ、生中が届いた。

二人はとりあえず、一口飲んで・・・

「それで？今日は、どうだったんですか？」

「聞くな、それを」

「ひょっとして・・・」

「そうだよ・・・」

「恭介が・・・」

「もういいだろ・・・」

西村は、もう終わったんだよな・・・と自分を無理やり納得させようとしていた。

第30話 「とまどい」

10時までには駅前に着いた恭介・・・

実は

山本と別れてから、あまり気が乗らなかった。

本当は、昨日断ろうと思ったが、受けた後すぐ断るのも気が引けた。とりあえず待っている恭介
すると

「おはよう。久保君。」

後ろから野村の明るい声がした。恭介は少し驚いた表情で振り返り

「あっ・・・おはよう・・・野村さん」

「どうしたの？元氣ないわね・・・」

「え？そつでもないよ。気のせい・・・気のせい・・・」

恭介は少しにこやかな顔を見せた。

「そつ？」

野村は満面の笑みを浮かべ。

「じゃあ・・・行きましょ」

「えっ?どこへ?」

野村について行く恭介。

「どこへって、とりあえず電車に乗りましょ」

二人は駅に向かった

偶然にも、その光景を二日酔いの渡辺が見ていた

そして

恭介あのやろ、山本さんならともかく野村さんまで・・・

30分ほど電車に揺られ、とある駅に降りた二人・・・

「じつよ・・・」

恭介を引いて店に入り注文する野村。

「このパスタが絶品なのよ・・・」

恭介は戸惑うばかりだった。

「ちよつと、何浮かない顔してるのよ・・・」

「いや・・・普通何か、大体予定を決めて・・・」

言い訳をする恭介・

「山本さんが気になるのでしょうか？」

野村の一言が恭介の胸をつら抜き、どきつと顔を凍らせた。

凶星だった・

昨日から気になって仕方がなかった。

「そんなことはないよ。」

恭介が言ったが、野村は

「凶星のようね・・・でも、今日は私の方だけを見てほしいの。いい？」

「本当に、そんなことはないよ。ただ、何も決めてないから」

「だから、決めてないほうが面白いでしょ」

「えっ？」

「だって、最初から何もかも決めていくと。それに追われるでしょ？」

「まあ、そうなんだけど。ある程度メインを決めて・・・」

「じゃあ。久保君何か決めてきた？」

「じめん・・・何も」

「ほら・・・もうっ・・・」

野村が言った頃に、食事が運ばれてきた。

「ところで・・・今日だけど・・・」

しばらく食事をしながら二人は、今日の予定を話し合った。

「ね。おいしかったでしょう?」

「はい。」

野村は、恭介の顔を見ていた。

それに気付いた恭介は、

「顔に何かついてる?」

「なんでもない・・・」

「本当に?」

「なんでもないよ・・・さて、出ましようか?!」

二人は映画館を見て、そして、喫茶店に入った。

「ねえ、久保君、この辺でお勧めの場所はないの？」

「お勧めって？」

「だから・・・二人で何か思い出になりそうな場所とか・・・」

「うーん。鷹尾山は？」

「今から？もう5時よ。だいたい、あそこへ行くカップルって別れるって聞くし・・・」

「じゃあ、恋人の木は？」

「あれは、韓国ソウルタワーのまねをただけでしょう。だいたい、一回目のデートで永遠の愛なんて誓えるの久保君？」

「そういわれると・・・」

「わたしじゃ不満なの？」

「そうじゃなくて・・・じゃあ・・・夕日を見に行こう」

「夕日？見る。」

喜ぶ野村、二人は喫茶店をでた。

恭介は、あるビルの前に立った。

呆然とそのビルを見る野村

「ここは・・・」

「わたしをバカにしてるの？会社じゃない・・・」

「まあまあ」

なだめる恭介・・・

二人は、屋上に上がった。

屋上からは、数々のビル群の間から、海が見え、そこに今にも沈みそうな太陽が海面を真っ赤に染めながら沈もうとしていた。

野村はこの光景に感動した、やがて、日が落ち、二人は帰ることにした。

家に着いた野村は、ベッドの上で、泣いた・・・私じゃないんだ・・・と

第31話 「x」

月曜

山本は野村に会って挨拶をしていると恭介とすれ違った。

「おはよう」

「あ・・・おはようございます。」と挨拶を返す恭介
しかし

野村は浮かない顔をしていた。

山本は少し気になって

「るみちゃん。どうしたの？」

「えっ？」

「何か暗いわよ」

「そっですか？」

「で・・・どうだったの土曜日・・・」

「別に・・・」と野村は歩くスピードを上げて行った。

「るみちゃん？」とおかしいと追いかける山本・・・

恭介はいつもの自販機の前で、休憩していると渡辺があらわれて、ニヤリと笑みを浮かべ・・・

恭介の顎の辺りを指差しながら。

「お盛んですねえ」。金曜は山本さん、土曜は野村さんと・・・

恭介は驚いた何でこいつか知っているんだ？

野村さんのことならわかるけど・・・

山本さんのことは、知らないはずだ。

それとも

俺の女装がばれた？

どきどきしながら

「何だよ！いきなり・・・」と聞き返すと。

「俺は見たんだよ。」

「だから何を」

「土曜日、野村さんと一緒にいるところを・・・」

その時、自販機の近くにいた野村は声を聞いて身を潜めた。

「野村さんと・・・ああ・・・いたさ・・・何か？」

「ふうん、認めたか・・・」

渡辺は、拍子抜けした表情をしたが・・・話を続けた。

「でも、お前、前日山本さんのところにいたそうだなあ？」

「お・・・お前・・・証拠でもあるのか？」

「西村さんが教えてくれた。」

恭介はその一言にうつむくしかなかった。

「・・・」

しばらくして、渡辺が

「お前みたいな奴とは、もう縁を切る。俺もどうかしてたぜ・・・同期だから付き合っていたが、前日女の所にとまって、翌日別の女とデートかよ」

言ったとき、廊下のほうでガタツと言う音がした。

そこへ振り向くと涙を流している野村の姿があった。

「野村さん・・・」と声をかける恭介・・・

「っ・・・」と声にならない状態で、恭介を見る野村・・・

次の瞬間

野村は、反対側へ走り出した・・・

恭介は「野村さん！」と追いかけた。

追いかける恭介・・・

何とか野村に追いついて野村の手を引いて

「野村さん・・・聞いてくれ・・・」と言うと野村は立ち止まった。

「野村さん・・・」と恭介が言った瞬間だった

バチーン！！

恭介の左頬にビンタが飛んできた。

そして

野村は何も言わずに去って言った。

一人残った恭介・・・

ぶたれた頬をさすりうつむいた。

そして

しばらくして

妙な安堵感に気付いた。

その頃

渡辺は西村に恭介のことを言っていた。

「何！、あのヤロ〜！！もうゆるさねえ！！」と西村は激怒した。

第32話 「はるかとるみ」

一方

野村は山本の所に向かった。

仕事をしていた山本は、ぞくつと背筋に何か殺気を感じた。
振り向くとそこには、野村が立っていた。

「るみちゃん。どうしたの？」

「……」と黙って見つめる野村。

「本当にどうしたの。黙って立ってて」

「はるかさん……」

「はい？」

「ちよつと……いいですか？」

「えっ！……わたし？」と山本は自分を指差した。

「そう……ちよつと……来てもらえますか」

山本と野村は、屋上にいた。

「るみちゃん……こんなところの呼んで。どうしたの？」

と話しかける山本・・・

「はるかさん・・・金曜日のことなんですけど・・・」

すると山本の顔色が変わった・・・

ひよっとして、

久保君といたことがバレたの？

と思いつつ話そうとした時に・・・

「久保君と一緒にいたでしょう？」

と先に野村が言ってきた。

「・・・」

山本は、答えることができなかった。

「いたのね・・・」

山本は、ただうつむくしかなかった。

「どうして？」

本当のことがいえない山本・・・

久保君が恭子だなんて言えないし・・・

どうしようかと困っていた。

「本当に、一体どうして？」と問い詰める野村・・・

山本は、考えたあげく・・・

「合コンの後、また、西村が現れたのよ・・・」

「それで？」

と野村は、山本の言うことを半信半疑の目で見ていた。

「その時は、恭子と勇気が追い返してくれたの・・・」

「だから・・・」

「ひょっとして、家に押しかけてくるんじゃないかと。」

「それで、久保君を呼んだの？」

「そう・・・」

山本のその一言を聞いて

野村はため息をついた。

そして、

「ふうん、それではるかさんの家に泊めたんだ。」

完全に山本が悪いことをしたかのように言い放った。

「ちがうわ・・・」

それまでうつむいていた山本は顔を上げ言葉に詰まった・・・

野村を見ると目に涙が・・・

「何が違うの？」

「だから。」

山本が言おうとしたら。

「ちょっと来い！」と言う声が屋上出口からしてきた、

「なんだよ・・・」

「貴様の根性叩きなおしてやる。」

その声を聞いて

西村と久保君だと二人は気付き、思わず出口の建物の裏に隠れた。

第33話 「3人の・・・」

恭介は、西村に引つ張られて屋上まで連れてこられた。

そして

屋上に着くとその場に着き飛ばされた。

「いててっ・・・何するんですか」

理不尽なことをされることに反発する恭介・

「お前、金曜、なんて言ったか？」

いきなり殴りかかる西村

バシツと言う音と共に、恭介の顔にパンチが飛んできた。

倒れこむ恭介

「イテッ」

そう言いながら立ち上がる

「だから、なんだってんだ。」

「はるかど肩組んで・・・一体どんな関係だ。」

また殴る

「西村さんには関係ないだろ。」

殴られながらも言い返す恭介・・・

「えっ・・・その翌日には、別の女とデートか?」

今度はみぞおちにパンチが入る

「くっ・・・」

息が詰まる恭介・・・

しかし

恭介は、反撃をしない。

「えっ・・・どうなんだ?」

殴り続ける西村・・・

「このやるつ、二股かけやがって。」

恭介の髪を持ち顔を上に引き上げ

「えっ!!どうなんだ!」

「あんたに、そんなこと言う権利ないだろつ。」

かすかな声で恭介は反論した。

「なに〜」

恭介の顔を地面に突き落とす西村・・・

「殴り返すこともできない。貴様な軟弱な奴に・・・」

今度は、恭介の腹部を蹴った。

その光景を建物の陰に隠れて見る二人。

しかし

恭介が自分を守っている姿を見て、自然と涙が出てきた

助けないと・・・

そう思うが・・・

暴力をふるう西村を見て、

過去の恐怖がよみがえり足がすくむ。

一方、

野村は、やっぱり久保君は、はるかさんのことを・・・目に涙を浮かべ見ていた。

隠れて二人を見つめる山本・・・

このままだといけない！

「やめて！」

山本は二人の前に飛び出した。

「はるか・・・」

振り向く西村

「はるかさん・・・」

顔を上げる恭介。

「久保君！もう！いいの！」

声をあげる山本・・・

そして、

「全部、私が悪いの・・・だから・・・もういいの・・・」

「はるか・・・どういう意味だ。」

大声をあげる西村。

後ろでは

恭介がゆっくりと立ち上げあり

「やめる！・・・」

叫ぶ恭介・・・

それを無視して山本は続けた。

「すべては、あんたと別れるためよ。久保君に協力してもらったの。」

山本は、涙を流しながら。

西村に向かって叫んだ。

その光景を野村はただ涙を流しながら見ていた。

「はるか・・・そんなに俺が嫌いか？」

西村は、なぜ山本がそんなことを言うかわからないと言う感じで聞いた。

山本は、両手に力をいれ、涙目のまま、西村をにらみ。

「嫌いよ・・・むしろ、憎いわ。」

「どういう意味だ！俺は、お前のごと愛してるのに！..」

驚いた西村が叫んだ。

「愛してる？あんたの愛って暴力なの？あの日、あんた、私に何をしたか覚えてないの？」

「・・・」

山本の言葉にただ黙り込む西村

「これまで、多少の暴力は、我慢してきたわ・・・でもね・・・もう憎しみしかないわ。だから、もう2度と私の前に出てこないで。」

山本が言い切った時、

「今まで黙ってりゃ。いい気になりやがって！」

西村は切れて今度は山本に殴りかかろうとした。

「きゃっ」

身構え目をつぶる山本・・・

しかし

西村からの衝撃が来なかった。

目をゆっくり開けると、

そこには、恭介が西村の腕をつかんで立っていた。

「はなせ！このやろっ！！」

腕を振り払おうとする西村。

次の瞬間だった・・・

西村は、宙を舞い、ドシンンという音と共に床に叩きつけられた。

呆然とする西村・・・

そして

恭介は、西村に言った

「男のこぶしは、誰かを守るためのものだ！！わかったか？」

恭介は振り返り山本に近づいた

「はるかさん・・・行こ！」

「貴様！！」

その光景を見た西村は立ち上がり殴りかかるうとした。

恭介は西村のパンチをよけ、腹部に一発かました。

「男として・・・人間として・・・最低だな・・・お前は。」

「くっ・・・」

崩れ落ちる西村・・・

そして

再び山本のほうへ振り返る恭介・・・

「はるかさん・・・」

「久保君・・・ありがとう・・・」

山本は恭介の方へ近づいた・・・一歩、そして、一歩と・・・

その光景を建物の影から見る野村・・・

第34話 「3人の・・・その2」

恭介と山本の距離が・・・

だんだんと近づいていく・・・

二人とももう止めて・・・

そう祈りながら二人を見ている野村・・・

しばらく、二人は見つめあった

「本当に・・・ありがとう・・・」

山本が言った瞬間

恭介の前で気を失い崩れそうになった。

「はるかさん？」

あわてて山本を支える恭介。

「大丈夫？」

声をかけるが反応しない山本。

思わず飛び出す野村・・・

「はるかさん大丈夫！」

「はるかさん……」

声をかける恭介……

野村は、必死に山本に声をかける恭介に

「とりあえず下の階に横になれるところあるから……」

「わかった……」

すっと山本を抱きかかえる恭介……

出口に差し掛かるとそこには、渡辺がいた。

「恭介……」

「どけ」

「あ……ああ……」

道をあける渡辺

そして

「ごめん……」

「いいよ……わかったら……」

そのまま階段を降りて行った。

それを見て、渡辺は上司の西村の方へ行った。

長いすに横たわる山本

「久保君・・・救急車呼ぶ？」

「大丈夫だよ・・・多分・・・」

「なんで？」

「たぶん・・・緊張の糸が切れたただだよ・・・」

少し笑顔を出す恭介

「久保君の、ひどい顔ね・・・」

「ちょっとね・・・」

「でも・・・」

「でも？って」

「ん？・・・ううん・・・なんでもない」

その顔を見て

うつむく野村

「あと・・・俺やっとくから・・・行っていいよ・・・」

恭介が声をかけると

「二人にはできないわ・・・むしろ私が残るから・・・」

「そうか・・・」

「他人が見たら変な誤解されるわよ」

「そうだな・・・」

そう言っつて山本を見つめている恭介。

それを見て

野村はうつむきながら声をかけた。

「あゝ・・・」

恭介は、その声に導かれ野村の方を見る

「なにか？」

「はるかさんのこと・・・」

声を震わせ

「どじっと思っているの？」

「どじっしてっ？」

恭介が答えに戸惑っている

「はるかさんのことすき・・な・・ん・・ですか」

その頃、後ろで山本が気がついた。

ここは？と思いつつ二人の声が方するほう見る。

二人はうつむき、しばらく沈黙した、恭介の口が開こうとした時、

耐え切れず野村は、恭介の口を手でふさいだ。

驚く恭介、野村の手が外れて何か言おうとした瞬間

「あなたが好きです。」

思わず声にしてしまった野村。

驚く恭介に、さらに

「好きです。」

野村は恭介に近づきキスをしようとした。

その時だった

野村はある視線に気付いた。そして、視線の方を見ると山本と目が合った。

一方、

山本からは恭介と野村がキスしているように見えた。

その光景に驚く山本・・・く・・・ぼ・・・く・・・ん

その瞬間悲しみの洪水が山本を襲った。

一方、恭介は、野村の両肩に手を沿え、少し距離をとり

「野村さん・・・」

そして、恭介が続きを言おうとした時、

「ごめんなさい・・・」

そう言って野村は立ち上がり口を押さえつつその場を去って行った。

第35話 「すれ違う二人」

しばらく呆然と立っている恭介

山本は、横になったまま、目尻から涙がこぼれていた。

そして、

目をつぶると自分のために殴られ続けた恭介の姿が浮かび

「男のこぶしは、誰かを守るためのものだ！！わかったか？」

恭介のセリフが耳をよぎった。

しかし

その後

野村の告白とキスシーンが再生される。

涙が止まらない・・・

恭介が山本のほうを見ると

涙を流す姿が目に入ってきた。

「はるかさん！大丈夫ですか？」

恭介は慌てて声をかけ、泣いている山本を心配そうに見つめた。

「どうしたんですか？」

山本は、恭介の方を見たが何もいわない。

どうしたんだろうと恭介は、一体どういたらいいんだ？と困っている

「出て行って！」

その言葉に戸惑う恭介・・・

動かない姿を見るとおもむろに立ち上がり

「大丈夫？」

気にかける恭介を押し

「出て！ 出て行って！」

両手で背中を押し恭介を外に追いやる山本

「ちょ・・・ちょっと・・・」

「いいから！出て行って！」

ついに恭介を部屋から追い出した。

そして

ドアに寄りかかりその場に座り込んだ。

一方

野村は、部屋を出たところで泣いていた。

山本の瞳が目に焼き付いて離れない。

そして

恭介が答えてくれなかったことに・・・

そこへ

恭介が部屋から追い出されて出てきた。

野村を見つけた恭介、

涙目の彼女と目が合い、

沈黙する二人。

気まずい空気が流れた

「ごめん・・・」

ただ謝る恭介

それを聞いて両手を自分の口に当て涙をこらえる野村・・・

そんな言葉は聴きたくなかった・・・

「そう・・・」

野村は恭介の前を一步、一步と歩き出した。

そして

彼の前で立ち止まり、うつむく彼の方へ視線をやる・・・

「ごめん・・・」と再び恭介が言う

野村は視線を外し、うつむいて再び歩き出した。

そして

屋上へ向かった。

屋上に出た野村・・・

この間恭介と見た夕焼けが彼女を照らしていた。

そして

野村はその場で泣き崩れた。

恭介は、階段を下り、いつもの自販機の前に座っていた。

山本とのが頭によぎる

西村を追い返して思わずかわしたキス・・・

自分の為に出てきてくれたこと・・・

そして

恭介は階段を駆け上がった。

第36話 「勘違い」

階段を駆け上がる恭介・・・

追い出された部屋の前まで来てドアを開けた。

「はるかさん！」

しかし

そこには彼女の姿はなかった。

恭介は山本のいる部署へ行った。

「おっ？ 山本は、早退したよ。ちょっと休養があるって・・・」

「そうですか・・・」

ベッドの上でひとり両足を抱え、座っている山本

いいのよ。これで・・・と一人無理やり納得しようとするが

楽しい時が思い出され、涙が出てくる。

何度納得しても

襲い掛かってくる悲しみ・・

やがて

抑え切れない涙に、両腕に顔をうずめた。

翌日

恭介を待っていたのは、西村だった。

「ちよつといいか。」

屋上へつれてこらえれた

「すまん。」

これが西村の一言目だった

これには驚いた。

てつきり昨日の続きと想っていた恭介・・

「西村さん」

「それとはるかのことなんだけど・・、まだ納得していないが・・」

一呼吸をおいて続けた。

「あれだけ嫌われたんじゃない」

「……」

「それと今回の件は、」

西村はかなり申し訳ないような顔をした。

「ええ。わかりました。」

二人はその場を離れた。

「るみちゃんおはよう。」

声をかける山本

「おはようございます。」

浮かない顔をする野村を見て

「大丈夫？ 顔色悪いけど……」

「大丈夫です……」

山本を見ると目を真っ赤にした姿がそこにあった。

野村は、それ以上言えず、すっとその場を去った。

その姿を見て山本は、昨日のことを思い出し・・・
言葉が出なくなった。

西村が去った後、恭介は山本にメールを打った

「話がありますの、14時頃屋上へきてください。」

それを見た山本は、最後のお別れね・・・、

何もそこまでしなくても思いつつ屋上へ向かった。

そこには恭介が立っていた

恭介は緊張しきっていた・・・絶対に告白しよう

屋上に着いた山本が恭介に話しかけた。

「久保君、こんなところまで呼んで一体何の用？」

山本が目の前の恭介を見ると直立不動で立っていた。

どうしたの・・・久保君・・・目の前の光景が理解できない山本

その時だった。直立不動のまま恭介が告白を始めた

「山本さん・・・いや、はるかさん。付き合ってください！」

その言葉を聞いて山本は、

「はあ〜!?!」

昨日・・野村さんとキスしてたくせに・・・一体何を考えてるの？

悲しみより怒りがこみ上げてきた。

山本は少し恭介に近づいた。

それをみて「やまもと・・さん」と声をかける恭介に

次の瞬間

パチーン

左の頬にビンタが炸裂した。

ぶたれた頬を手で覆い顔を元に戻すと

そこには目に涙を浮かべ怒った山本がいた。

「バカ!」と叫び

山本は走り去って行った。

階段から下りてくる山本を見つけた野村が

「はるかさん・・・」と声をかけたが、山本は無視して走って行った。
なにあれ・・・と思いつつも

気になった野村は屋上へいくと

左手を頬にあて、呆然と立ちす恭介がいた。

第37話 「困惑」

恭介が屋上出口に入ると野村が立っていた。

恭介はチラッと見たものの

やがて

とぼとぼ階段を下り始めた。

「ちよつと・・・」

声をかける野村・・・

その言葉に足を止める恭介・・・

「そんなに好きなの？」

野村は、か細い声で聞いた。

「ああ・・・」

恭介は再び歩き始めた。

その頃

山本の携帯が鳴った。

山本は携帯の画面を見るのをためらった。

ひょっして……久保君？……

そう思つて、携帯を見るとフランの勇気からだった。

「もしもし、山本です。」

「あつ……はるかさん？今日の時間の確認なんですけど……」

「あつ！」

大声をあげる山本

「どうしたんですか？急に大声をあげて。びっくりするじゃないですか。」

「忘れてた……」

「あゝよかった。」

「ありがとう……本当に忘れてたわ。今からでもいい？」

「えっ？……まあいいけど。でもあと1時間はかかるよ。」

「いいので、ちょうど時間つぶしだから、じゃあ、今から行くね。」

山本は携帯をきった。

フランについた山本・・・

「いらっしやい・・・はるかさん・・・まだ一時間かかるって・・・」

「で勇氣ちゃんは？」

「俺は暇ですよ。」

勇氣はちよつとむつとした表情で言った。

「じゃあ・・・ちよつと、お茶しない？」

山本は無理やり勇氣を誘い出した。

「えっ？あの久保がそんなことを・・・」

コーヒーを口に持って行くこうとする手が止まり驚きの色を見せる勇氣

「そつよ、昨日るみちゃんの告白受けて、キスマまでしてよ。信じられる！..」

「本当に？」

「そつよ。おつよ。おつよ。おつよ。」

「俺、2、3回しかあったことないし。そんなことするのかな？」

「許せないでしょ。」

「っていつか、最後に会った時、久保の奴、はるかさんのこと好きだと思つてたけど・・・」

勇気の言葉に固まる山本・・・慌てて反論した

「なぜ、そんなことと言えるの？勇氣君？」

「あの時、はるかさんをすぐ助けに行つたし。」

「それが」

「大体、西村さんは彼にとって会社の先輩でしょ？」

「そうよ」

「それを知つてて、というか忘れて、はるかさんを助けに行つたでしょう。」

「単に、忘れてただけでしょう」

「それに一歩間違えば、女装がばれる可能性もあつたし・・・」

「それは・・・」

言葉に詰まる山本

「その後、フランが閉まっていけなくなったのを聞いたときの二人」

「やめてよ」

「ふたりとも、本当にうれしそうだったし。」

「もう。やめて。」

頬を真っ赤にし、両手を頬にあて困った顔をした山本。

その表情を見て、勇気が

「はるかさん、許せないだろうが、本当は、好きなんだから……もつと素直になりなよ。」

「でも……」

目をおろおろさせ、どうしたらいいのか、わからない様子の子の山本。

「久保の奴、本気かも……信じてやったら。」

「でも。キスしてたのよ。どう説明するの?」

「そこが少しわからないとこなんだけど……」

「だから……もうやめましょう。そろそろ行きましょう。」

二人は、フランへ戻った。

第38話 「勇気」

恭介の携帯がなった。

「もしもし？」

「フランの勇気だけど……」

「あつ……こんばんわ……」

「ちょっと、今晚あいてるか？返すものもあるし」

「ええ……まあ」

呼び出されて喫茶店に恭介が行くと、

そこには

勇気がいて、ある紙袋を差し出した。

「これ……」

「これは……」

「この間の服。」

「あつ……忘れてた……すっかり」

浮かない顔をする恭介、

そして

袋見てため息をついた。

「勇氣さん・・・ありがとう。持ってきてくれて・・・言ってくれれば、取りに行ったのに・・・」

少し懲らしめてやろうと思っていた勇氣は、恭介の表情を見て、本当に二股かけてるんだろうか？と疑問を抱いた。

「店までか？」

「ああ・・・」

「また、女装をしにか？」

「いや・・・そこまで」

そう話しかけた恭介は再びため息をついた。

そして

「女装・・・か・・・」

言葉を漏らしうむついてしまった。

「えらく元気ないな。」

「そうか・・・」

「なにか、あつたんか？」

それまでうつむいていた恭介は、

しばらく

勇気の顔を見て、両手をソファアの上に置き、天を仰いだ。

「ふられたよ……すっぱりと」

「ふられた……って誰に？」

「誰でも、いいだろ」

恭介はコーヒーに手をつけた

「ひょっとして……はるかさん？」

そういう勇気の言葉に恭介の動きが止まる。

コーヒーカップを置いて恭介は、

「かなわないな　勇気さんには……」

「でも、合コンの後、感じよかったじゃん」

「そうなんだけど……よくわからん」

「本気なのか……」

「ああ……でも、あきらめないといけないかも」

「なぜ？」

「元々、元彼が近づかないようにと付き合い合ってるふりをしてきたから……それが終わったんで。」

「付き合い合っているふり……がいつの間にか本気に？」

「まあ……でも、彼女は違ってみたいだ。」

またため息をついた恭介

その様子を見て勇氣は、

「二股なんかかけてないよな。」

「そんなことしてない。しかも、」

「しかもって？」

「告白されたんだけど、その娘には断ったんだ……」

勇氣は、かくつとなった

山本との話が違うからだ。

「もう……いいだろう。」

話をやめたそうな恭介に

「本気なんだろう・・・」

「しかし・・・」

「好きなんだろう・・・まだ・・・」

その言葉に恭介は大きく息を吸い込み、

そして

その息をはいた。

「もう！ふられたんだよ！」

「ちゃんと、その思い伝えたんか？」

「いや・・・」

「じゃあ、やってみろよ・・・駄目もとで」

第39話 「迷想」

もう・・・この恋は、終わったんだから・・・

野村は、自分に言い聞かせた。

しかし

恭介への想いが、彼女を絶望へ導く

今までのことを思い返し

そして

気付いた。

そもそも久保君は、自分のじゃなかったんだ・・・

そうよ・・・と涙を流しつつ・・・

今日で、お別れよ、久保君・・・

もう・・・この恋は、終わったんだから・・・

山本は、自分に言い聞かせた。

しかし

勇気の一言が、彼女を混乱に導く

今までのことを思い返し

そして

気付いた。

やはり好きなんだと

しかし

あのシーンを思い出すたび

胸が苦しい・・・

許せない・・・

どうしたらいいの？

さびしくひざを抱え、

この苦しさから逃げたい・・・

こんな想いするなら・・・

だから

もう終わりにしたい・・・

けど……

もう……この恋は、終わったんだから……

恭介は、自分に言い聞かせた。

しかし

勇気の一言が、彼を前に導く

今までのことを思い返し

そして

気付いた。

やはり好きなんだと

しかし

山本の「バカ」の一言が耳に残る

でも

自分の想いを伝えないと。

この苦しみも

この悲しみも

すべて開放されないんだ

だから

本気でぶつかろう

第40話 「屋上で・・・」

メール・・・か・・・

着信音を聞いた山本・・・

まさか・・・久保くんじゃ・・・

あゝ・・・この場で叫びたい・・・

久保君だったらどうしよう・・・

見たくない・・・そう思いながら携帯を見た

しかし、彼女の予想通りメールの送信者は恭介だった。

どうしよう・・・

メールのことが気になる山本

しばらく悩んだが・・・

とうとうメールを見てしまった。

そこにはシンプルな文章があった。

「17時に屋上へ来てください」

どういう意味？

だって……るみちゃんと……

ひょっとして、報告？……そうだったら……

行く？

行かない？

山本は、悩んだ。

そして

ええい！！……

結局、山本は屋上に向かった。

屋上に上がるとそこには恭介が山本の方に向けて立っていた。

うわ〜こっち向いてるし〜・・・山本は思いながら

「久保君？何のよう？」

山本をじっと見つめる恭介・・・そして優しい言葉で彼女の名前を呼んだ

「はるかさん・・・」

その声に身構える山本・・・

一体何なのよ〜そう思いつつも平静を装うとする山本

「だから〜話って何？」

「はるかさん・・・」

そう声をかけ近づく恭介・・・

近づく恭介に見とれる山本・・・

うそ・・・近づいてくる・・・胸の高鳴りがとまらない・・・

どうしよう・・・

う・・・動けない・・・

こっちこないで・・・

山本はなんとか声を出した。

「だ……だから、何よ」

恭介は、そつと抱きしめた。

うっわっ!! どうしよう……

そうパニックになっていると耳元で恭介がささやいた。

「好きです。」

「えっ……」

胸の鼓動は全開……もう何も考えることが出来ない山本

動くことすら出来なかった……

そして

抱きしめられた感触に思わず目をつぶってしまった。

しかし

両手を添えようとした時だった。

頭にあのシーンが……よみがえってきた……

そう……野村と恭介のキスシーンが……

「いや・・・」

かすかな声を上げた。

えっ・・・い・・・いや？・・・その声に恭介の腕の力が抜けた

その隙にすぐに恭介の腕の中から離れた山本・・・

そして、

山本は、目に涙を浮かべ恭介をにらんで言った。

「どうして・・・今頃・・・そんなことを言うの？」

「そ・・・それは・・・」

恭介の言葉をさえぎって山本は叫んだ

「るみちゃんとキスしたくせに!!」

「何を言っているんだ。俺は・・・」

「私見たんだから、あの日・・・私、気付いてたんだから!!」

恭介は、山本が言うことが理解できなかった。

「誤解だ！！俺は野村さんとキスなんかしていない。」

恭介は、聞こうとしない山本の両肩に手をあて目を見て

「信じてくれ・・・俺を」

何も言わず

うつむく山本・・・

キスしていたくせに・・・

キスしていたくせに・・・

キスしていたくせに・・・

しばらくして

山本が

「でも・・・でも・・・」

「本当に信じてくれ。野村さんとは何もなかったんだから・・・」

「でも・・・ごめんなさい。」

恭介の両腕を振り払い山本は、走り去って行った。

恭介は、ただ彼女を見送るので精一杯だった。

気付いた山本は、いつもの自販機前にいた。

初めて恭介に会ったのもここだった。

それを思出し懐かしく感じた。

何でこうなっただらろう・・・

ふと気が抜けたのか、目から涙がこぼれた・・・

「はるかさん」

そこへ横から声がして慌てて涙を拭き振り向く山本

そこには

野村が立っていた。

「なに？るみちゃん・・・」

「えつと・・・」

そう言つて大きく深呼吸をする野村

「なによ・・・」

「久保くんのことなんだけど・・・もう返さなくていいわよ」

「はっ？るみちゃん何言つてるの？」

「だって、元々、私のものじゃないし」

「えっ？好きだったんじゃないの？」

「ただ少し気になってただけなの」

「私、見たのよ、あなた達がキスしているところ・・・」

山本は思わず本音を漏らした

「えっ！？キス？私と久保君が？・・・まさか・・・」

山本の言葉に驚く野村、その表情を見て、山本は、

「じゃあ・・・私が見たのは？」

「さあ？それにあの時、振られたの・・・わたしが・・・」

不思議そうにいう野村の姿を見て・・・

えっ……じゃあ……私が見たのは……？

そして、どう答えたらいいかわからなかった。

その顔を見て野村が山本の方を叩いた。

「なにポーっとしてるの、早く行きなさいよ！！」

「えっ？」

「まだ待ってるかも。」

「だれが？」

「だれがって……わかってるでしょ？」

それまで暗かった山本の顔が明るくなり、その場から走り出した。

野村は、その場でため息をつき、これでいいのよ……とつぶやいた。

屋上で恭介は、夕日を見て立ち尽くしていた。

やっぱり駄目だったか……

胸が痛む……

どうしようか……

これから・・・

少しため息をつく、

そこへ後ろから足音が近づいた。

振り向くとそこには、山本がいた。

立ち止まる彼女・・・

それを見た恭介は、なぜか夕日の方を向いてしまった。

恭介の後姿を見る山本・・・

山本は、思わず後ろから恭介に抱きついた。

「ごめんなさい・・・」

「・・・」

「ごめんなさい・・・もう信じないなんていわない。」

その言葉に驚く恭介・・・えっ・・・

そして、恭介の背中から山本のかすかな声が聞こえた。

「好き・・・です」

恭介は、思わず山本の手をはずし振り返った。

「今なんて・・・」

恭介を見上げる山本、

「好きです。あなたを・・・」

しばらく見つめ合う二人、

そして

二人はキスをした。

数日後・・・

「あの・・・」

自販機に向かって、飲み物を選んでいる女性に

後ろから声をかける恭介・・・

そして

「あの・・・今晚・・・お食事でも・・・」

言おうとした時だった彼女が振り返り言った。

「君、今なんていったの？」

「だから・・・今晚どこに行く？」

「いいわよ、ところで、お願い事あるんだけど、聞いてくれる？」

「いいよ・・・」

少し変な顔をする恭介

「大丈夫よ、そんな無茶は言わないわ。」

「ひょっとして、・・・」

「そう、合コンで一人また足りないの・・・」

「えっ〜うそだろ〜」

驚きの声を上げる恭介、その顔を見た山本はにっこりと笑い

「うそよ。」

自販機の前で二人の笑い声がこだました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7868m/>

間違いで始まる物語

2011年9月24日10時41分発行